

ヴィランネーム
Valley

Green

lane

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あの日、緑谷出久の心はバラバラに砕け散った。そして生まれ変わる。緑色の破壊者として。

最終話に挿絵を挿入させていただきました！

目次

次代の象徴は堕ち、全てを壊す者となる	1	それぞれの職場体験。	82
たどえ、地に堕ち闇に染まっても彼の心はヒーローにしかかなれない	14	ヒーロー殺しステイン	92
緑谷出久の原点	25	彼女の想い	106
USJ襲撃。再会する2人	34	ダイナマイト	117
決着。そして：	48	喪失	133
戦いが終わって、それから束の間の安寧	62	エピソード	148
悪意の目指す場所 聖火の継承	72	番外編	
		愛の逃走★挿絵あり	162
		番外編 破綻者	172
		番外編 愛の逃走2	185

次代の象徴は堕ち、全てを壊す者となる

人は生まれながらに平等じゃない。これは僕が齡4歳にして知った現実だ。

「無個性でも……個性がなくてもっ!!賣方みたいな……ヒーローになれますか!」

穏やかな陽気に少し冷たい風が肌を撫でる。それでも、僕の心は激しく脈動し目の前の存在に問いかけた。

2メートルを超える身長、鍛え上げられた肉体は、まるで地球でも持ち上げられそうだと錯覚する程の安心感を放っていた。目が眩むほどの眩い笑顔をこちらに向ける憧れのヒーロー、オールマイトは、僕に……

「プロはいつだって命懸けだよ。『個性』がなくなるとも成り立つとはとてもじゃないが……口には出来ないね」

僕に……

「……夢を見るのは悪いことじゃない。だが……相応に現実も見なくてはな少年」

そう、現実……。わかっていた。個性が無い人間がヒーローになるなんてただの夢だ。夢でしか無い。

この日、緑谷出久は夢から覚めた。そして、ヒビ割れてくすんだ思いが砕け散る音を聞いた。

「じゃあね少年」

遙か遠くの憧れだった存在は消え、暗い雲が太陽を隠す。暗雲が立ち込み、空から涙が零れ落ちる。

アスファルトを黒く染め、暖かった風は今ももう吹かない。代わりにどこまでも冷たい雨と風が心の熱を奪う。

「可哀想に。でも、もう大丈夫」

ぼやける視界、俯いた顔を上げればそこに……

「何故って？」

醜悪な顔に笑みを貼り付け手を差し出される。

「僕が来た」

その手はヒーローのそれとは全く違った。どこまでも凍てついた悪意。それでも僕は……

その手を握り返してしまった。

これは、僕がこの世界の不条理を壊す物語。

「来世は個性が宿ると信じて」

目の前の存在に告げられる。その目はこちらをドン底に突き落とし全てを否定するが如く口は弧を描いていた。

「屋上から…ワンチャンダイブ!!!」

浮遊感。地面が近づいてくる。いや、僕が飛び降りたんだ。無個性なのは嫌だったから。もう全てを捨てて逃げ出したくて、考えることすら許されない自分の最期の抵抗。人生を賭けてでも、この先どうなろうとたった一度でも彼に見返してやりたかった。僕は君の人形でもなんでもないと!!!

5秒後の衝撃に備え身体を強張らせる。でも、最後まで見続けるんだ。俯く自分を救ってくれたあの人のために!!

「目覚めたかい、緑谷出久」

消毒臭が満ちた部屋。天井にはパイプやコードが繋がり、僕の目を照明が突き刺す。

思わず目を細め横に居る人物に目を向ける。

「ハッピーバースデイ。君は今、生まれ変わったんだ」

「これから期待しているよ、僕の頭として」

悍ましい悪意を煮詰めた存在がボクを見つめ返す。彼の目を反射した僕の笑顔は、とてつもなく醜悪に嗤っていた……

「先生、すごく……良い気分です、頭の中が空っぽになったようです」
身を起し、自分に誓う。

「オールマイト……かつての憧れ……その存在を叩き落とす！」

緑谷出久、”個性”超思考。一瞬の内に全てをシユミレートし、答えを出すことができる。思考速度は1秒で常人の1000秒に値するだろう。

そして、”個性”怨み。他人から受けた悪意を溜め込み、放出する。その性質は、身体強化、衝撃波、レーザー等のエネルギーとして使うことも出来る。

「手始めにまず……」

「ボクが来たってことを世界に知らしめないね」

砕け散った想いは黒く染まり新しく再構成される。溢れた欠片は闇にくべられ、更に闇を増幅させる。

「勝己く帰ろうぜ」

あのクソナードが消えてから一ヶ月が経った。俺の手には、焼け焦げたノートが収まっており思い出すのは、あの時放った呪いの言葉。もしかして……

「まだ、あいつのこと気にしてんのかよ」

「てか、無個性だし消えても別に良くね？」

「そくそく考えすぎだって」

「誘拐されたってことなんじゃねー？」

「あほ、無個性誘拐して何になるんだよ」

「まあ、そうだよなあ、なんせむこせ「うるせえ!!」」

ごちやごちやと煩いモブを爆破して黙らせる。俺はあいつの心配なんざしてねエ。だが、どうにも、おぼさんの、あいつの母親の泣き叫ぶ顔が脳裏から消えねえ。それはまるで、俺のせいであろうなつたと言わんばかりに俺を責めたててきやがる。

「最速でトップヒーローになる」

足を止めれば、振り向けば罪の意識でまともじゃいられなくなる。だから、ただひたすらに上だけを目指し続ける。そして言ってる。俺はオールマイトをも超えるヒー

ローだ。テメエの頭が高かっただけの話だったなア。

「ふふふ、もう、終わりかい。ヒーロー」

スーツを纏い、深緑色の髪と目に嘲るような笑顔。まだまだ幼い顔立ちが残る少年だがその存在は、立っているだけで圧倒的な威圧感と底知れぬ悪意を放っていた。

眼前には、倒壊した家屋、衝撃で辺りは火に包まれ、黒煙を上げている。空は淀み、地には這いつくばるヒーロー。誰かが言った。悪夢だと。

「なら、死ね」

ヒーローの体を闇色の光線が襲う。顔を苦痛に歪め睨み返すも、その光線はヒーローを……

「私が来た!」

貫かなかった。金色の髪に、二本のアホ毛。まるで勝利のサインと言わんばかりの平和の象徴がそこに居た。

「オールマイト……」

「なっ!!君は!あの時の少年!!」

驚愕の表情をするオールマイト。おかしいなあ。全てを救うなんて嘘だったね。あ

遂に、光が闇を飲み込み、雲は晴れ、太陽が顔を出す。

「オールマイト……、やっぱり眩しいなあ」

ボクの最大火力はオールマイトを消すに至らなかつた。天候さえ変える余裕もあつたようだ。本当に……眩しすぎる。

「はあつ、はあつ。……少年、いいかな？」

ただオールマイトは力を使いすぎたようだ。やはり弱体化しているのは本当だったようだ。

「今更何ですか？ 平和の象徴」

あの時の光景を鮮明に思い返す。あの日もこんな晴天の日だったな……と少しずれた考えをしながら、憧れからの否定の言葉を思い返す。

怨みの力を纏いながらも飛び出せるように準備する。

「何故、ヴィランなんかに。そして、その個性は？」

わかりきつたような質問。十中八九時間稼ぎだろう。

「しようもない話をするんですね」

あの時の、怒りを！

「教えてあげます。平和の象徴」

あの時死んだ自分を!!

「全てはあの時否定されたからだ」

あの時の、悲しみを!

「誰にも認められない」

夢を打ち砕かれたその復讐を!!

「ああ、認められない。認められない。認められない。認められない……」

一瞬の空白、そして。

「だから、全部、ぶっ壊れればいいんです」

ニタアつと笑い飛ばし、想いを語る。彼はいつもしている笑顔の裏で何を感じている

んだろうか。

「……シット! 私のあの時の言葉が……」

「少年……すまなかつた!!」

オールマイトは自分との和解をしようとしたんだろう。けれど、その言葉は。

「ふふふ、もう……」

あまりにも遅すぎた。

「遅いです」

体から溢れる怨みを、増幅させる。今度は防ぐことすら出来ない質量で……いや、そろそろ他のプロヒーローが来る。そうなれば面倒だ。増幅を止め、威力を広範囲な衝撃波に変えてオールマイトと距離を離す。

ちようど横に、黒霧さんが現れる。思った時間通りだ。

「Green valley これ以上は危険です」

「わかりました。ありがとうございます、黒霧さん」

「ツ!!待てツ!まだ話は終わって…」

まだこちらに手を差し出すオールマイト。その苦悩する顔が見たかつたんだ…!

「平和の象徴」

「次は届くといいですね」

「忌まわしき過去との決別。次は確実にオールマイトを……」

仕留める!!

黒く広がる霧の中で、ボクは彼をどう殺すかブツブツ呟き考え始めた。

『続いているニュースです』

トレーニング後に何気なくつけたテレビを流し見する。

『昨日、〇〇市でヴィランが暴れ、プロヒーロー3人が重症を負いました』

映像には、ヴィランと対峙するオールマイト。闇色の光をパンチ一つで吹き飛ばしていた。

『幸い近くにいたオールマイトがヴィランを撃退。辺りは倒壊した家屋がありますが怪我人はいない、とのことです』

『警察は、このヴィランの行方を捜索中です』

ちらりと見えた、あの緑色の髪。まさか……

いや、ねエか。あいつは無個性だ。

「トレーニングに戻るか……」

オールマイトを越えるために!!

「どうだったかい、緑谷出久」

薄暗いバーの中でボクは先生に報告する。

「やはりオールマイトは弱体化していました」

「しかし、やはり平和の象徴。向こうが本気なら今のボクでは勝ち目は少なかったで

しょう……」

オールマイトの超パワーは規格外でボクの怨みも飲み込むほどだ。

「トレーニングします」

「目標は、オールマイトと殴り合いができるまで」

「だから、宜しくね？ 弔くん」

「ああ？ んだよ先生このガキは？」

身体中に手をつけた青年に挨拶する。

「ボクの名前は緑谷出久：超人社会をぶっ壊すものさ」

彼に握手を求める。彼とは長い付き合いになりそうだ。

「はっ、お前、なかなかいいなあ」

4本指で握手を返された。

「どうして4本で…ブツブツ いや、彼の個性によるもの？ なら条件は5本。効果は

？ 範囲はどこまで？ 足の指は含まれるのか？ いや、そもそも発動条件を制限している可能性も…ブツブツブツブツ」

「おい、先生こいつ大丈夫かよ」

ヴィラン連合の卵、死柄木弔は出久の異常な独り言に若干引きながら

来たる破壊の時に心を震わせた。

「大丈夫。あれは素だ。元々だったよ……」

心なしかオールフオーワンも引き気味だ。まさか個性付与の施術をする前に夢中で分析されまくるなんて、予想外すぎた。例えるならば解体される直前の魚に現在の状況を解説される……といったところか。

「さて、面白くなってきたな」

「唯一、僕を倒しうる存在はもうこちら側だ」

邪悪に嗤う。どこか悪戯が成功した子どものように。

「次に勝つのは私達だ」

たとえ、地に堕ち闇に染まっても彼の心はヒーローに
かなれない

「見てくれ！このヒーローコスチュームを研究して出来たインナーを!!なんと脂肪燃焼性がUPして着れば痩せるんだ!!」

夏の陽射しがジリジリと身を焦がし、遠くではセミの鳴き声が聞こえてくる。夏の暑さにも負けない商店街の喧騒に辟易し更に顔を顰める。

「なんで、こんなことに…」

ボクが何故街中を歩いているかというと、いつも昼まで寝て、起きたら腹を空かせたと煩くなる弔くんが原因だ。

「寿司が食いたい」

起き抜けの一言が始まった。

4本指で握られている、寿司のチラシ。たしかにヴィランだって人間であることには変わりない。彼らにも体には血が流れているし感情だってあるし欲求もある。

しかし、だからといってパシリにして良いわけでは絶対でない。

「俺も黒霧も目立ちすぎる。その点、お前ならただの市民に紛れることが出来る」

「頼むよ。寿司が食いてえんだよ」

まるで子供のわがままのようにパシリを頼まれる。

「しようがないなあ」

あの時のボクを殴り飛ばしたいほどに、安請け合いしてしまったことに酷く後悔する。夏の暑さの中でパシリすることになってしまった。怨み溜めちやつていいかな？

フラフラと大通りを外れて、日陰を歩く。人が多いと面倒だからね。

「お兄さん！暑そうだけど大丈夫かい？この外は飴玉、中はひんやりアイスの食感が楽しめるお菓子をあげるよ！」

そうして歩いてると駄菓子屋の人に話しかけられる。一応フードを被ってバレないようにしているが…夏にフードを被っているせい心配されてしまったようだ。

「いや、あの…結構で「遠慮せずに、ほら！」……ありがとうございます…」

無理やり渡された五つの飴玉。そこにはオールマイトのデフォルメがそれぞれ印刷されていた。

「お、オールマイト！僕の知らないイラストだ！この飴、新商品なのか！」

驚きで、つい声が出てしまう。周りをキョロキョロ見て誰もいないことを確認…：しよ
うとしたところで一つのお店に目が行ってしまった。

「あつちには、最新のフィギュア！ポスターもある！なになに…：当店限定グッズ!?こ
れは一度お目にかからないといけないぞ…」

電気街の一角にあるオールマイト専門店。普通に大通りを歩いていたら辿りつか
ないこんなところに…：穴場すぎる…

「はっ!?僕はまた夢中になって…」

オールマイトを憎むと決めたのに何やってるんだ…

今は、寿司屋に行くことに集中しよう。あんまり遅いと吊くんに怒られてしまう。

「ありがとうございます」

お寿司のテイクアウトは中身を水平にすることが命なんだ。少しでも傾くと全てが
傾く。そして一度傾いたらもう二度と直すことができず、微妙な気持ちで食べることに
なるからね。

しばらく歩いていると公園が見えてきた。何となく懐かしい気持ちになり中を窺っ
てみる。

「ここは…僕たちが先にいたんだ…だから、だから！出ていってよお！」

目の前には、いつかの情景と重なるボクがいた。

遠い昔、上級生と喧嘩になった時に、とても怖くて涙が出てきて、足がすくんで感覚がなくなつてゆく、でも、それでも、憧れのヒーローは笑みを絶やさず堂々としていて……僕は必死に真似をして……

「あーん？何か文句でもあんのか？」

大型バイクに乗った不良のなかでも一際、格好が派手で、あからさまにリーダーな奴が1人。

向かいには小学生が5人。皆を守るように前に出て立ち向かう、彼に僕は目を離せなかつた

「兄貴、こいつ震えてやすぜ！」

「おうおう！悔しかったらママに慰めてもらえよ」

「あーあー、カッコつけちゃつて。泣かせるねえ」

その取り巻きが3人と、わかりやすいぐらいにチンピラが言いそうなことを小学生に吠える。

体格差と風貌は恐怖の対象になる。あれだけ年齢が違えば、その度合いは彼の小さな

体で受けられるものではない。

「ちよつとビビらせてやりやすー！」

取り巻きの1人が、爆発音を手から出す。

爆破されて音が出ているわけではなく、単純に音を出す個性のようだ。

それでも、恐怖の象徴からもたらされた行動に、彼らは肩をびくつかせ、目を瞑る。

ああ、本当に胸糞悪い。

「カース・エアー」

ボクの怨みのエネルギーを掌からそのまま放出する。突風を生み出し、彼ら4人をバイクごと纏めて空に巻き上げる。

そして、今度は地面に叩きつけるように操作する。自慢のバイクは念入りにガラクタにしてやる。

「いつてええええ！」

「俺の10年ローンで買ったバイクがああああ」

「なにもんでやすか!？」

「まじ、ひどすぎるくね!？」

「本当に、胸糞悪い」

体から怨みが勝手に溢れ出す。地面を揺らし、砂が巻き上げられる。

「君たちみたいなのがいるから」

「誰かが苦痛をアジワウことにナル…」

そう、こんなのが、こんなのさえないなければ…誰かを苦しませるだけの存在なんて、キエテシマエバイイ…

「ちよお、こいつマジでやばそうだぜ…」

「や、やばいでやす!」

「た、助けてくれええ!!」

「逃げろおおお!!!」

「報いを受けろ」

4人を風で空に舞いあげ、宙を一回転させ、遠くに飛ばす。死にはしないだろうけど、もしかしたら当たりどころが悪いと骨折するかもね。

「「「ウワアアアア!!」」」

子供たちは、さっきまでの威圧感ある相手が、まるでギャグのワンシーンかのように空の彼方に消えていったことにぼかーんとした表情を浮かべていたが、すぐに

「す、スゲエエエエ!!」

「お兄ちゃん!ありがとう!」

「ヒーローみたいでカッコ良かった!」

「あいつらの情けない顔見たか!?!」

危険が去つたことに安堵する。

「お、俺一人でもあんな奴ら倒せたし!!」

皆を庇っていた少年がボクを睨みつける。

凄いなあ、本当に。小さな勇氣に思わず目を細める。それがあまりにも眩しすぎて。ボクの手ではもう手に入れられないそれを。

僕は彼と目線を合わせるようにしやがみ込む。

未だ震える肩に手を置いて、彼の頭を撫でる。

「よく立ち向かったね。でも、もう大丈夫!」

彼を安心させる、とびっきりの言葉。最高の笑顔とともに言い放つ。

「なんだって、僕がいるから、ね!」

「うわああああん!!!」

彼の涙腺はもう限界だったのか、凄い勢いで泣き出す。水たまりができるほどだ。

「よく頑張ったね」

しばらくして、彼は泣き止み落ち着きを取り戻した。辺りのバイクの残骸を端にどけ

る。

「いいかい？次は大人の人を呼んで遊ぶんだよ？」

「うん…」

しかし、泣き止んでも、あれだけ怖いことが起きたから元気を出さなんて無理な話だ。こんな時、あの人なら笑顔だけで安心させてしまおうだろう。いや、ボクはボクのやり方で。彼を元気づければいいじゃないか！

「君にプレゼントをあげる」

商店街で貰ったオールライトキャンディを彼の小さな手に渡す。
ちよんど5個あって、良かった。

「わあああ！オールライト!!」

彼の顔にはもう、宝石のような笑顔が浮かんでいた。

「皆で仲良く分けて食べるんだよ？」

「うん！」

よし！もう彼は大丈夫。ボクに出来ることは無くなった。

「じゃあね」

せめて、最後にヒーローらしく立ち去ってあげよう。

突風を起こし、空に浮かび上がる。エネルギーを明るい紫色にスパークさせながら体

に纏う。溜まったエネルギーを下に放出して一気に空へ昇る。眼下では、放出した影響で彼らに風が吹きつける。

「か、かつこいいい……」

我ながら上手く決まったな、という達成感と、お寿司が入った袋を確実にひっくり返してしまつて、弔くんは怒られる未来を想像した。

「傾くどころか、ひっくり返しちやつたよ……大丈夫かな……」

緑谷出久が去つた後の公園で物陰から一部始終をみていた1人の男が姿を現す。

「やはり、彼は……」

その眩きは空の彼方へ消えていった。

結論から言うと、なんとかありませんでした。

あのあと、弔くんは遅いうえに、ひっくり返つたお寿司を見て、

「お寿司じゃなかったら粉々にしてたよ」
ボクに、イチヤモンをつけまくるのであった。

緑谷出久の原点

「ダークネス・カウル!!」

夜闇の輝きを全身に溢れさせる。溢れ出たエネルギーは闇色にスパークしながら宙に弾けて消える。その状態でボクは脳無に接近する。

オールマイイト並みのパワーと、再生力。真正面から平和の象徴を殺せるように設計された怪人。

ボクの個性制御の調整にと、ドクターが貸してくれたのだ。ボクの個性、超思考の本領は高速戦闘時における、相手の研究を可能にし、戦いながら膨大な量の情報を精査、そして相手を打ち倒す最適解を見つけ出せることにある。

もう一つの個性。怒みは憎しみの心を燃やしてエネルギーにすることが出来る。エネルギーの変形には、繊細な制御が必要となり、放出以外にも、盾に変えたり、全身にエネルギーを行き渡らせ身体強化することも出来る。

上から振り下ろされる右腕に、こちらも力を溜めた右腕を脳無へ突き出す。力は拮抗したようにも思えたが、少しずつ此方が押されていく。

「まだ…まだアアアアア!!」

エネルギーを限界まで漲らせて、豪腕を弾き飛ばす。その瞬間振るわれる圧倒的な速さの左フックをしゃがんで回避し、足を払う。しかし寸前に踏みとどまった脳無は巨体を活かしたダブルスレッτζハンマーが豪腕から繰り出され堪らず、その場から回避するために右に飛び退く。しかし、飛び退いた先には既に怪物が腕を振りかざしていた。

「なっ!?!」

考える間もなくこちらに迫る凶悪な暴力。落ち着け。超思考を発動させ、この場の最善策を導き出す。エネルギーをバリアーへと変換し、一瞬均衡させる。すぐに破られるものの、その時にはボクは背後へ回り込み、全身に力を溜めて、右腕に集約させている!!!

「カオス…」

「スマッシュ!!」

脳無の胸をボクの腕が突き破る。さっきまで超速で動いていた脳無は嘘のように活動を停止した。パチパチパチ…と拍手の音が響き渡る。

「流石です。緑谷出久…いえ、Green valley」

頭を黒いモヤ状にしたヴィラン連合の1人、黒霧。彼の個性は、ワープゲート。対象を任意の場所に転移させることができる。

「ふー…、どうしたんですか？もしかして何かあったんですか？」

「ええ、近いうちに、戦力を集めて雄英高校に襲撃に行くとのことですよ。」

その言葉はボクの脳にグルグルと回り始めた。かつての夢の跡地。ヒーローを志す全ての子どももの目標でもあり、試練でもある。倍率300倍を超える、最難関にして頂点。ボクも、大きくなったら、雄英に行くんだ！って目指したものだなあ。残念ながら、個性は発現せず、半ば諦めた状態だっただけに、決めることすらできないでいたけれど…

「雄英高校に襲撃…ですか」

ボクの中で興味が湧いた。難関な入試を乗り越えた本物の天才だけが入学を許可された高校。当然ヒーローとして活躍する前の卵。どんな凄い人たちなんだろう…とワクワクしないわけがない。そんな場所への襲撃。警備や監視は厳重になっていることだろう。それを踏まえて攻めに行く余りあるリターンがある。ということか。そういうえば、オールマイトが着任する話もあったな。

「目的はやはりオールマイトということか」

「察しが良くて助かります。今年度からオールマイトが教鞭を振るう。そんな場所での

…

「オールマイトの殺害、とともに失態を犯した雄英を地に墮とし、ヴィラン連合の名を轟かせる…と弔くんは考えたのか」

普通なら馬鹿げた考えだと一笑に付すだろう。天下の雄英の監視網を破り侵入。そして、No. 1ヒーローの殺害。

「こちらには怪人脳無、そしてその怪人と互角にまで戦えるようになった貴方がいる。死柄木弔はそうお考えです」

黒霧がいて、脳無がいて、ボクがいる。更にオールマイトは少しずつ弱体化している。どこまで弱体化しているか、は見せないように振る舞っているけれど、ボクの一撃で息切れを起こしていたのと、活動時間が年々少なくなっていることから、間違い無いだろう。

「なるほど…楽しくなってきたね…」

無個性が故に誰にも認められず、その声は淘汰される。いつもそうだ。弱者の声は淘汰され、理不尽を押し付けられる。

ヒーローが輝いて、大きな影を落とし込んだのに、その影から目を背け見ないようにして、まるで救えなかったものなんて無かったかのようにヒーロー社会は構築されてきた。そんなことが当たり前のように罷り通るなんておかしい…

そんな世界を作ったのは誰だ？ ヴイランもヒーローも暴力を押し付けているじゃないか。両者の違いなんて本当に紙一重だ。力を振りかぎすのが認められている……ただそれだけである者はヒーローに。ある者はヴィランに分けられる。

そして、無個性なんて、そこいらの石扱いき。

ふざけた世界だと思おう。お前たちがヴィランや石ころと呼んだそれにも、感情があつて、何も感じないわけなんてないのに、こちらへ見向きさえしない……

「漸く、この手で貴方を壊せる……!!」

まずはその社会の象徴を壊す。そして無視し続けていた影に全てを壊されていくその様を震えて見ることにしかできないようにしてやる。それこそが緑谷出久の原点。社会への復讐。

オールマイトを越える。ただその目標だけに全力を尽くす、形はどうであれ、俺を脅かす過去が消えた。ただそれだけだ。

頭に過ぎるのは、あの日、顔が黒く塗りつぶされた存在にかけた、言葉。そいつは無

個性のくせに、俺の目の端をうろちよろして俺を苛つかせる。消えろ、と思った。

テメエは後ろからついてくるただのモブで、ビビりなくせして、俺に手を差し伸べやがった。オドオドした目は打って変わって、まるで俯瞰した目で俺を見下すその存在がとてつもなくムカついたんだ。その上、雄英を受けると身の丈にあわねえあいつにキレちまって口からつい出てきてしまった自殺教唆。

そしてあいつは俺の前から姿を消した。消してしまった。巷では誘拐だ、なんだと言われているが、俺からしてみれば、俺が殺したようなモンだった。

消えろと、常に思っていた。でも…

「ほんとーに消える奴がどこにいんだよ…」

眼前に現れるロボットを片っ端から爆破していく。あいつに対する怒りが更に爆発していく。

「YEAH H A A A A A A A A A A!!これで何ポイントだよあいつ!?!」

「既に1000ポイントは超えているぞ…」

「彼は間違いなく今年のトップね」

「そんな彼にも、更なる受難ってわけさ!」

彼の目の前に現れる超巨大ロボット。0ポイントの出現だ。

「見せてみる。お前の全てを」

巨大ロボットが俺を踏みつけようと足を浮かせる。横目で瓦礫に足を挟まれて逃げ遅れた受験生を一瞥し、爆破を起こして飛び立つ。

「俺を…」

「見下してんじゃねエ!!!」

「ハウザー…インパクトオオオオ!!!」

手の爆破の推進力を利用して錐揉み回転。その勢いのまま、最大火力の爆破を叩き込む。巨大ロボットの頭部を爆発させてガラクタに変え、周りに飛び散る破片は空いた手で燃やしていく。

「あの巨大ロボットを1発で…!!」

「しかも、逃げ遅れた受験生を庇う余裕すらある!!!」

モクモクと立ち昇る煙と瓦礫をバックに俺は周りを見渡す。

そして、逃げ遅れたクソモブの上にある瓦礫を爆破する。クソモブはこちらを弱々しい目で見上げてくる。ちっ、めんどくせえ。

「逃げ遅れてんじゃねえよ、クソモブが」

「あ、ありがとう…？てかそれ私の名前?!」

「麗日お茶子！私の名前!!」

立ち上がったクソモブはどうでもいいことに、自己紹介までし始める。テメエなんざ丸顔で充分だ。

「おい、丸顔。まだ試験は終わってねえ」

「気い抜いてんじゃねえぞ」

それだけ言つて俺は爆破で残りの敵を倒しに行く。

「そ、そうやった…って！丸顔!？」

後ろから、文句が聞こえてくるが無視をする。

「あー!!もう怒った！私もやってやる!!」

丸顔は走り出す。一瞬で持ち直すあたり、クソモブとはちがうみてえだな。

「TIME UP!!!!」

しばらく、残りの敵を片付けていたら終了の合図が出た。この程度じゃまだまだダメだ。もっと強くなってぜってえにオールマイトを越えてやる！

「粗野で乱暴でプライドが高そうなものの、不器用ながら、相手を励まし希望を与える……最高だぜ！少年！」

「来い……ここが君のヒーローアカデミアだ!!」

ヴィラン連合とヒーロー。両者の邂逅は目前に迫っている。

USJ 襲撃。再会する2人

雄英高校のUSJで行われる災害救助訓練、ボク達ヴィラン連合はオールマイト殺害のため、そのタイミングに襲撃しに来た。

しかしまさか、ここで君の顔を見ることになるなんてね。

「久しぶりだね、かつちゃん」

「クソデクウウウ!!!」

こちらに一直線に迫る一人の生徒。爆豪勝己。ボクのかつての幼馴染みだ。

「爆豪！止まれ！」

ボサボサの恐らく教師であろう人物が止める。

「テメエエエ!!何しとんだゴラアア!!」

「知り合いですか、緑谷出久」

「昔のね」

黒霧さんからの言葉を返す。

相変わらず、ヴィランよりヴィランしてるね。かつちゃん。

「無視してんじやねえぞクソナードがああああ!!」

爆破で加速しながら迫りくるかっちゃん。ボクは右手を払って生み出した風圧で遠くへ吹き飛ばす。

「クソがああああ!!」

「13号にイレイザーヘッドですか。先日頂いた教師側からのカリキュラムではオールマイトがここにいるはずなのですが……」

「どこだよ、せつかくこんな大衆引き連れてきたのにさ……平和の象徴、オールマイトがいないなんて。」

ボク達の後ろにはこの作戦を行うために連れてきたヴィランたちがいた。

「子どもを殺せば来るのかな?」

ニヤリと笑う弔くん。その顔は悪意に満ちていた。

「先生!侵入者用のセンサーは!?!」

「もちろんありますが……」

「センサーが反応しねえなら、向こうにそういう個性持ちがいる。馬鹿だがアホじゃねえぞあいつら。……用意周到に画策された奇襲だ」

「13号！避難開始！上鳴！学校へ連絡を試みる！」

レイザーヘッドは指示をして、ヴィランの集団へと立ち向かう。

出入り口に向け避難を開始する13号と生徒たち、しかし。

「させませんよ」

黒霧さんがいつのまにかモヤを広げて立ち塞がっていた。彼なら作戦通りに生徒を散らしてくれるだろう。

「緑谷、お前は どうする？」

弔くんに見尋ねられる。ここには脳無もいる。作戦では生徒を散らす予定だったが、ちようど暇になってしまった。ボクもどこかへ行こうかな？

「待てやああああ！デエクウ!!!」

その必要は無かったようだ。彼に向き直る。今までは怖くて怖くて仕方なかったが、今はもう恐怖は消えていた。

「何かボクに言うことでもあるのかな？」

「テメエ……母親ほっぽりだしてなにをやがんだ、ああん!」

「君にそんなこと言われるなんて心外だね。他でもない、君に……。ボクをいじめ続けて、ゴミみたいな扱いしてたくせに」

忘れもしない。幼い頃は無個性のくせに、反抗してきたボクを、動けなくなるまで爆

破で攻撃されたり、中学までいじめてきたことを。

あの日には自殺教唆までしてきたくせに。

「クソナードがヴィランになっただけでずいぶん調子に乗ってるじゃねえかよ！ ええ!!
……ぶっ殺して、引き摺ってでも連れて帰る!!」

「へえ……面白い冗談だね。ボクを連れて帰るだなんて。出来るものならやってみなよ」

手を眼前に突き出し、エネルギーを溜める。溜めたエネルギーを圧縮して闇色に光らせる。

「まあ、無理だろうけどね」

人差し指を指して狙いを定めてレーザー光線を放つ。高速で飛来した光線はかっちゃん頬を掠める。

「ふふ……避けないと死んじゃうよ?」

「っ!?!」

今度はレーザーを間隔なくばら撒く。爆破で宙に逃げるかっちゃんに高速で接近して叩き落とす。

「がはっ!？」

無様に地に墮とす。まだだ、まだこんなもんじゃない。

「今までの全部を君に返す」

「全力で来なよ。かつちゃん。君の全力を捻じ伏せてあげる」
構える。接近戦で君を倒すために。

「道端の…道端の石ところだったくせによおお!!」

「こちらに向かってくる。しかし、遅い。ハエでも止まってるみたいだ。

「ダークネス・カウル20%」

ガラ空きの胴に、拳をめり込ませる。すかさず膝蹴りを叩き込み、衝撃波を手から生み出し、弾き飛ばす。

「浅いな…」

打撃の衝撃を瞬間的な反射で咄嗟に逃している。涙ぐましい努力だね。

「どうだい？今まで見下してきた存在にボコボコにされる気分は？」

懲りずに向かってくる彼の攻撃を躲す。右の大振り、爆破、爆破を利用して蹴り。

「ちっ…避けてんじやねえぞ!!」

「まだわからないのかい？君は」

「僕より…弱い!」

「カオス・スマッシュユ！」

爆破を躲して顔に右拳を叩きつける。地面を惨めに転がっていく。

「ぐはあっ!!？」

なんとか立ち上がろうとするも、ダメージが蓄積されている。震える体を起こそうとして、崩れ落ちる。

「クツソがあっ…!!」

「まだ諦めていない…その目…ムカつくね…」

立てないかっちゃんを見下す。君が一番されて嫌がることだったね。

「見下してンじゃねえ…!!」

「徹底的に君の心を折ってあげないと」

両手にエネルギーを集め前に突き出す。

「ギルティ・パニッシュユ!!」

極大の闇の奔流が地面を巻き込みながらかっちゃんへ迫る。

「ガアアアアアアアア!!!」

爆破で対抗するも、一瞬の均衡の末、闇の光が呑み込む。

「終わったね」

そこには砂煙が晴れ、ボロボロになり倒れ伏した幼馴染みの姿があった。

「そこで眺めてなよ。平和の象徴が殺される瞬間を」
ボクは中央で戦っている弔くんの元へ足を進めた。

「は？一人逃した？黒霧…お前、ワープゲートじやなきや壊してたよ…」

中央へ戻り、弔くんの元へ合流する。

「弔くん、状況は？」

「緑谷か…イレイザーヘッドはこのザマさ」

脳無の下敷きになり血を撒き散らすイレイザーヘッドの姿があった。

あの数のヴィランを退けたのは流石だけど、脳無には敵わないね。

「でも、救援を呼ばれちゃったよ」

「ゲームオーバーさ…」

オールマイトは来ないし、救援を呼ばれたのか。

「でも、帰る前に」

そう、帰る前に。やらなければいけない。

「子どもたちを殺して行くぞう」

「そうだね」

ボクは出入り口の生徒たちに目を向ける。

「なら、ボクが行く。弔くんはそこで眺めてなよ」

足を進めた瞬間、氷に足を凍らされる。

「新手か」

氷の元を辿り、白髪と赤髪で分かれた生徒を目視する。

「そうはさせねえ」

「オラアアアアア!!」

今度は体を硬化させた生徒がこちらに向かってくる。これが、雄英の生徒。勇敢だなあ。

「カオス・スマッシュ」

氷を割り、衝撃波で生徒を吹き飛ばす。隙が生じた氷の生徒ヘレーザー光線を放つ。

「ブラックレーザー」

「ちいっ!!」

貫通力に特化したレーザーを氷の氷壁が防ぐ。その隙に抜け出す。

「彼らは任せたよ弔くん」

「わかった。やれ、脳無」

邪魔が入ったが目的は変わらない。一足で出入り口まで跳ぶ。

「麗日！芦戸！13号連れて下がれ!!」

目の前には5人の生徒がいた。マスクをつけた腕が6本ついている男。黄色いコスチュームを身にまとった男。ヘルメットを被り肘に射出口がある男。パツパツのスーツの女の子。ピンク色の髪をした女の子。

そのどれもが、難関な試験を潜り抜けた天才たちだ。

「やあ、ヒーローの卵たち。さっそくだけど」

「死ぬ覚悟はできたかなあ？」

威圧感を出し、希望など無いということを身に刻ませる。

「っ!？」

彼らの顔を冷や汗が伝う。怯えてる者すらいる。誰から、殺そうか？

「お前は爆豪と何か話していたな、何者だ!？」

マスクの男からの質問。クラスメイトと何らかの関わりを持つ人間がいたら時間稼

ぎを含めて情報が欲しくなるよね。

「そうだね、知りたいよね。」

「ボクの名前は緑谷出久。かつちゃん……爆豪勝己とは幼馴染みってところかな」

「緑谷……出久!!」

「ヴィランネームはそのままGreen Valley」

「君たちを殺す者の名だ」

醜悪に嗤ってみせる。

「ひっ!?!」

あんまり、無抵抗な子を殺すのは少し気が引けるけど、ヒーローの卵なら頑張って立ち向かってきてよね。

「爆豪はデクと言っていたな」

耳が良いね。

「それは蔑称さ。出久は漢字にすると、何も出来ない役立たずのデクの棒のデクとも読めるからね。これ以上話すつもりはないよ。」

「時間稼ぎもここまでだ。じゃあ、殺すね」

告げた瞬間、黄色いコスチュームの男のラッシュを受ける。速いね。増強型かな？

右、左、右と繰り返される拳を見極め躲しながらダークネス・カウルを20%に引き上げる。さあ、反撃だ。顎を撫でるように拳を放ち体勢が崩れたところに、一撃を叩き込む！

「カオス・スマッシュ」

振りかぶって繰り出される腕。当たる瞬間に横から何かが、彼に巻きついて、回避する。仕業の主を見れば、射出口からテープのようなものが出ている。あれで躲されたのか。

息をつく間も無く、酸のような液体が襲いかかり、マスクの男の6本の腕で体を叩きつけられる。

「やったか!？」

砂煙から上げる地面から立ち上がる。

「全く効いていない!？」

「なるほど……筋力増強に、腕や体の器官を複製。テープに酸か。どれも強い個性だ」

「この場でもバランスを取れている。少し厄介だな」

「なに、ブツブツいっとんの!!」

パツパツスーツの子から岩の雨が放たれる。何かを打ち出す個性か？

岩を弾き飛ばす。しかし、周りに岩が集まって囲まれる。

「解除!!」

重さを忘れていたような岩たちが一齐に降り注ぐ。これは…無重力か!

「カオス・スマツシユ!」

腕の一振りですべての岩を吹き飛ばす。これで全員の個性の把握が終わった

「うそやろ…?」

「まずは、後衛から潰す。ブラックレーザー」

後ろの3人、無重力、テープ、酸を無力化するべく光線が放たれる

「麗日!! 芦戸! 逃げろ!!」

テープで、二人をレーザーから救ったか…しかし、代償にレーザーが体を貫いた。

「ぐはあ!」

「瀬呂君!」

「瀬呂!」

「テメエエエ!!」

筋力増強の個性持ちをあしらう。繰り出される拳を更に強力な臂力で弾く。

「カオス・スマツシユ!」

「砂藤!」

すかさず、割り込む複製碗。6本の腕を全てガードに費やす。ボクの一撃が彼を岩場に叩きつける。

最後に、砂藤と呼ばれた男の土手っ腹に拳をめり込ませる。

「ぐはあっ!!」

倒れ伏す男たち。少し順番が変わってしまったが最初に一番厄介なテープを倒せたことが大きかった。

「くらえっ!!」

酸が飛ばされる。近接がいなくなった今、諦めの悪いそれを手から生み出した突風で弾く。

「っ、強すぎ…!!」

「さて、これで終わりだ」

ボクは彼女らに近づき、衝撃波を放った。強力な推進力を持った衝撃が彼女らを襲う。しかし。

「もう大丈夫!」

「私 came!!」

その直前に巨大な影が、衝撃波を打ち返した。

「オールマイト…!遅かったですね」

「やってくれたな！少年！！」

「これは…少し痛い目にあってもらおうぞ！！」

悠然と現れたオールマイト。その顔にはいつもの笑顔は浮かんでいなかった。

決着。そして…

筋骨隆々の体躯に、青を基調とした、コスチューム。髪は逆立ちその精悍な顔は今
憤怒にまみれていた。

「オールマイト！あいつ、すごく強くて…みんなが!!」
ピンク色の髪をした女の子が訴える。

「H A H A H A!!…もう大丈夫さー！」

生徒の心配そうな表情を察し必死に取り繕う。しかし。

「何故って?…私が来た!!」

依然としてその顔には笑顔はなかった。

「オールマイト…!!」

こちらへ向き直り、鬪志を剥き出しにして睨みつけられる。貴方がそんな顔をするの
は初めて見たよ。

「僕は物心ついた時から貴方のファンだった。貴方のまるで息をするかのよう
に人を救い、笑顔を絶やさないその姿にずっと憧れて。学校で無個性だからと蔑ろにされても、

ヒーローになるっていう夢を否定されても」

「それでも、貴方のカッコイイ姿を見るだけで力が湧いてきて、前を向けた!!明日を生きようって思ったア!!」

だからこそ、あの日告げられた言葉が胸に刺さった。誰に否定されても折れなかった鉄は、憧れのヒーローを前にして、あっけなく叩き折られた。

「でも、ボクはヒーローになれない…!!貴方が全て否定した!!!」

失意の底。ずっと憧れてきた存在に夢を否定され、全てが終わった。
終わったと思った。

こちらに手を差し伸べるスーツのおじさん…先生に出会うまでは。先生はボクに立ち上がるための足をくれた。羽ばたくための翼をくれた。ボクが、どれだけ欲しても手に入らなかったものをくれた!

「全てを否定されたボクが、ヒーローになれないなら…」

「ヴィランになるしかないよね?」

「少年!!…あの時のことは!!」

生まれ変わった後に最初に湧いた感情は怒りだった。無個性だからとゴミのように

扱う社会だとか、自殺しろ、と言わんばかりの幼馴染みの態度だとか。でも一番、頭にきたのは。

No. 1ヒーローにまで自分の夢と存在意義を否定されたことだった。

沢山絡み合ってしまったそれは、先生から頂いた個性、怒みとバツチリ噛み合った。ボクが怒れば怒るほど、怨めば怨むほど高まってゆくエネルギー。その最大出力はオールマイトにだって届き得る!!

そんな、超エネルギーを個性を発現したばかりに調整すらままならないのでは…と懸念した先生がもう一つ個性をくれた! 超思考!! 考えれば考えるほど没入してしまうボクの性格を最大限考慮してもらった個性!

「無個性だったボクに個性をくれた先生の期待に応えるためにも」

「貴方をボクの手で殺して証明するんだ!!!」

ボクの狂騒にオールマイトがたじろぐ。貴方を正面から叩き潰す!

「ダークネス・カウル!! オーバーパワー!!!」

激しい闇の奔流を纏い、制御する。地面はクレーターを作り、エネルギーは立ち上る。高速戦闘を可能にするべく、超思考も発動させる。

「はアアアア!!! いくぞ!!!」

右足に力を溜めて跳躍。一瞬でオールマイトの眼前へ身を乗り出す。

「マジか?!いきなり本気かよ!？」

両腕を胸に構え、ガードの姿勢を取られる。ボクのパワーと貴方のガード。どちらが強いか試そうじゃないか。ボクの腕がオールマイトのガードを突き破る。空いた腹部に打撃を叩き込む。

「ゴハアツ!!」

口から苦悶の声を上げ、血を吐き出すオールマイト。ヴィランは待つてはくれないぞ？

「カオス・スマッシュ!!」

両腕に力を込めて、顔面、胴へと凶碗を無数に振るう。一撃一撃が即死級のパワーだ。オールマイトはなんとか、ガードと回避をして、こちらへ腕を振るう。繰り出された拳に拳を打ち合う!!

ぶつかり合った力と力は、互いの反発力でボクたちに帰ってくる。両者は地面を削りながら後退していく。

「ハアツ、ハアツ!!」

ガードが間に合わず打ち据えられた拳はオールマイトを膝をつかせる。ボクは彼の心を更に折るためにあることを思いつく。

「オールマイト…どうしてボク達はこんなリスクを冒してまで襲撃しに来たと思いますか？それは…貴方を殺せる算段があるからだ。でも、それはボクじゃあない…」

「わかりますか？今頃中央ではどんなことになってるのかなあ!!」

「何だ?!まさか…」

ボクの言葉がただのハツタリではないということに気づくオールマイト。

「もしかしたら、もう死んじやつてるかもね…!」

「うおおおおお!!!」

最悪な予想が頭をよぎり、焦った表情で此方へ向かってくる。

「退いてもらおう!!少年!!こんなところで!!油を売っている暇はない!」

貴方の全力をボクの全力で叩き潰す!!!

「アトロイトオオオ!!!」

「カオス…!!」

「スマアアアアアツシュ!!!」

互いの最大パワーを乗せた拳がぶつかり合う。辺りは余波で炸裂し、照明のガラスが割れ、衝撃波はUSJ内の全ての窓ガラスを破碎していく。砂煙が舞い、行き場を失ったエネルギーは空に舞い上がり、天井を突き破ってなお、更に天を貫く。

「ぐううううツツツ!?」

拮抗したのも束の間、振り抜かれた拳はボクを突き飛ばす。地面へ叩きつけられながら転がり、受け身を取る。

ボクの右腕は完全に折れていた。全力の勝負で負けたのか…!?

「ボクの全力が負けた…?!? 上回られた!? ありえない!? 弱体化しているはずなのに!! どうして!？」

口からは大量の血だつて吐いている。どう考えても、ボクが負ける要素なんてないはずだ!?

「忘れてしまったのかい? 少年。ヒーローとは、苦難を乗り越えていくもの…!」

「プロはいつだって命がけ!! 命を賭して、綺麗事実践していくお仕事さ…!!!」

目の前に現れ、追撃をされる。彼の拳が腹を打ち据える。

「デトロイトオオオ…スマアアアツシユ!!」

「グバアアアアあ!!!」

とてつもない、衝撃が体を襲う。目がチカチカし、息が上手くできない。

「私の勝ちだ!!」

堂々と、胸を張って、宣言するオールマイト。憎んでいたはずなのに、どうしようも

なく殺したかった相手なのに、ボクはその時、不覚にも。

「体が動かない…や」

「……やっぱカツコイいなあ…オールマイトは」

そう。不覚にもかつこいと思ってしまった。

「しばらく、寝ていてもらうぞー！少年！！」

首筋に打撃を叩き込まれ…視界が暗転していく。

あの後、ボクは黒霧さんに回収された。弔くんたちは、脳無を使って氷の個性を使う子を、対処していたが、実力差を感じた彼は炎でも攻撃するようになったらしい。鈍くなっていた動きが元に戻り、厄介だと判断した弔くんと黒霧さんはワープゲートで弔くんの腕をワープさせ、彼を掴んだものの、倒れていたイレイザーヘッドに個性を消される。

更にオールマイトがその場を一掃。脳無との一騎打ちを制され、プロヒーローたちが

現れたところで、ボクを連れて退散したらしい……

「完敗だね。弔」

「ごめんさい、先生……」

薄暗いバーのモニターから声が聞こえる。先生の声だ。

「まさか、脳無がやられるとはのお！」

もう一人、ドクターと呼ばれる男の声もする。

「ヒーローどもが、生徒どもが予想以上に抵抗してきた」

「オールマイトが一番ヤバかった。弱体化していたはずなのに、チートにも程がある」

脳無がオールマイトを殺す算段だったけれど、確実に殺すためにボクが居たのに、オールマイトに負けてしまったから、退却する羽目になったんだ。ボクが脳無と協力していたら……

「ごめんね、弔くん」

弔くんに謝る。ボクの力に期待してきてくれたのに、応えられなかった……！

「緑谷……、手傷を負わせたオールマイトに本命の脳無がやられちゃったんだ。どのみち、勝ち目はなかった。戦力差を見誤った俺のミスだ……。だから、気にするなよ。な？」
あの弔くんが、ボクを慰めている……。らしくない、という感情とともに、次こそは必

ず……という想いが生まれる。拳を握りしめて誓う。

「弔くん……ボクは!!もつと強くなるね」

「ああ、頼む。俺にはお前の力が必要だ。」

「戦力を集めよう。有象無象じゃあ勝てない。それがわかった」

「オールマイト……社会のゴミめ……今度こそ、ぶつ壊してやる。」

弔くんが悪意に満ちた顔で嗤う。

急激に成長する悪意。邪悪に笑う恐怖の象徴。悪意だけで人を殺せそうなその威圧感、ビリビリと肌を突き刺しボクの心臓が高鳴る。

雄英襲撃から数日が経ち、重傷を負ったものの、命に別状は無く動けるようになった俺はとある人の家を訪ねた。

気まずい雰囲気がある。落ち着け俺。言うことはわかってんだろ。ただ一

言、言えばいいだけだ。迷うな！

「勝己くんが来てくれるなんて、久しぶりね」

俺は、緑谷引子おばさんに会っていた。彼女は記憶の中の時よりも更に太り、目には隈が浮かんでいる。その目に生氣は無く、暗い表情をしている。

「おばさん、言わなくちゃなんねえことがある」

USJでの、あいつのことを。

「単刀直入に言う。デクの野郎は生きている」

驚愕に目を丸めるも、しかし、また同じ表情が変わる。

「勝己くん…気を遣ってくれてありがとうね…。でも、もう一年も帰ってこないのよ…もう出久は…あの子は…！」

机を叩きつけ、身を乗り出す。あいつから受けた傷が痛んだが、関係ねえ!!

「この間の雄英襲撃!!あいつが首謀者の1人だったア!!」

圧倒的な身体能力。遠近両方を使い分ける派手な個性。最後には、この身を痛めつけた極大のレーザー！

「しかも、どういうわけか生意気に個性まで使ってやがった！」

「そんな…!?うそ…ほ、本当なの!?あの子が、本当にヴィランなんかに!?」

ただでさえ、居なくなつたのに、更にヴィランになる。経緯があるにせよ、何にせよ、考えなかつたのかよ!?あのクソはよお!?テメエの母親泣かせて、何してんだコラ!!生きてんなら、まず顔を見せにこいやクソナードが!

「で、でも、本当に…生きてるんだよね…」

「ああ、安心してくれおぼさん。あのクソは俺が必ずぶつとばしてからここに連れてくる。ここで正座させて二度と生意気な口利けないように爆破してやる…」

「あの、ぶつとばすつて…?それに趣旨が変わつちやつてる気がするよ……。……。でも、ありがとうね勝己くん」

こちらに頭を下げるおぼさん。まだだ、まだあれを言つてない。俺があいつを虐めたこと。自殺教唆までしたことを!

「まだあんだ…言わなきやなんねえことがある…」

切り出したものの、迷いが生じる。今まであいつにしてきたことを正直に伝えようか迷つてしまう。伝えてしまえば、俺はさいテエな奴に成り下がりが、認めてしまえば、自分が今まで守ってきた心を傷つけてしまう。俺の心が弱かつたばつかりに隠してきたちつぽけなプライドのために。だが、言わなきやなんねえ!認めなきや始まらねえ!!

言え、爆豪勝己!自分のみみつちいプライドなんざ今は捨てるときだろ!

「俺は、今まで見えねえとこであいつを虐めてきたア！さらに無個性のくせに俺と同じ
雄英受けるって言ったあいつにムカついて……来世は個性持てるように屋上から飛び
降りろって言ったんだ…!!」

「言つちまつてんだああ!!」

己の胸の内に巢食う思いを吐き出す。

「ごめんなさい!!ごめんなさい!!あいつはもしかして……俺を恨んでヴィランなんか
…!!」

「勝己くん」

顔を上げる。その顔に怒りも、絶望も浮かんでいなかった。

「正直に話してくれて、ありがとね。実は、知ってたの。あの子が酷い目にあってるの
は」

「個性が出なくて、私もあの子を否定しちやったわ。謝ってばっかだったんだけどね」

「オールマイトみたいなのヒーローになるっていうあの子の夢を私自身が認めてあげられ
なかつた…。ついて来て」

おばさんに案内された部屋に入る。そこには、どこもかしこもオールマイトのグッズ
で敷き詰められた部屋だった。

「あの子の部屋に……これ」

おばさんが手にしたものは一冊のノート。そこには将来のためのヒーロー分析…と、なんとも子供じみた題名のノートがたくさん積み上げられてあった。

「私にも、否定されて、学校でも良くない目にあってるのに、あの子…。こんなにくさくさんノート作って…。いつか…オールマイトみたいなヒーローにつて、ずっと思い続けているの」

「おばさん…」

「あの子は強い子よ…。だからね勝己くん。誰かを恨むなんてあり得ないわ!!」
涙を流しながらそう語るおばさん。それは俺にも伝染する。

「ッ!？」

目から涙が出る。罵倒されることばっか、考えたのに…俺は…

「俺はッ…俺はアツ!!あいつを、絶対、ここに連れて帰らせます…!」

「うん、よろしくお願いします…勝己くん!」

この日、俺のくだらねえ自尊心は壊れた。いや、壊した。あいつを連れて帰るために、初めて自分を曲げた。

「ふふつ、そうとわかったらおばさん、まず痩せなきゃね！この間、着るだけで痩せられるっていう噂のインナーを買っちゃったの。なんかねえ、ヒーローコスチュームを研究して出来たらしいの！」

「お、おう…?」

「勝己くんが頑張るなら、私も頑張るよ！」

ああ、もう大丈夫だ。この人は。さっきまでの陰りは消えた。

「私、勝己くんに救われちゃった！頑張つてね！ヒーロー!!」

「ああ、任せてください。救い倒してやらあ!!」

決意を胸に秘め歩き出す。もう迷わねえ！

「待つてろよクソデクっ！」

今にテメエを引き摺り戻してやらあ！

戦いが終わって、それから束の間の安寧

「料理を教えてほしい…と。一体、何故…?」

雄英襲撃から、数日が経った。僕の右腕の骨折はある程度治り、新たな目標を掲げる。僕の全力ではオールマイトに届かなかった。個性をフルに使っても跳ね返された」

「だから、食生活から見直そうと思うんだ。健康的な食事が頑強な肉体を作りあげると思いうから」

体を作り直して、更に鍛える。限界以上のエネルギーを扱えるように。その基となる下地を作り替える。そしてここはバーだけど、簡易的なキッチンもちやんとついている。

「駄目ですか…? 黒霧さん」

ダメ元で聞いてみる。

「そういうことですか…」

「教えてやれよ、黒霧」

「こいつが強くなれば出来るが増える。なら、サポートするべきだ」

弔くん…

「死柄木弔…まあ、そういうことなら…」

「こいつが美味しい飯作れば食い放題だ」

「そつちかー!!」

弔くんの性格を考えてなかった…！そうか、そうだよな…

「わかりました。緑谷出久。そういうことならば協力しましょう。して、そのために必要な物は率直に言う…食材！」

食材がなければ、何も出来ない。つまり。

「買い出し、ということですか」

「はい、しかし私は目立つ故買い出しが出来ない、というわけで」

「まずは、お使いから、いきましようか」

「おつ…かい…!!」

ボクに新たな試練が待ち受ける！

雄英の次のイベント、体育祭。私は今、それを目標にして個性の強化をしている。今日は、週に一回の買い出しの日、私、麗日お茶子はそのために家の近くのスーパーに来ていたのです。

「もやしが19円、買わんと!」

私の家は貧乏です。だから、日頃から節約をして生活しています。

私も節約に関しては自信があります。上京をして、生活が苦しくてやりくりするのは大変ですが、このスーパーでの動き方もわかりました。

「あとは……うどんかなあ……」

予算をオーバーしないように計算して買い物をする。雄英で訓練をする毎日。買い物はそんなハードな毎日を癒す休日の、密かな楽しみです!

「これはどっちがいいんだろうか……ブツブツ豆腐は絹と木綿の二つがあつたけれど、実用的な栄養が含まれているのはどっちだろう……そもそもこんなこと考えたことないから判断できないぞ……!!」

どこかで見た緑色のモサモサの髪。地味目の容姿、二度見する。や、まさかね。

「本物や!!」

思わず声を出してしまう。不味い、こっち見た!身構えてしまう。

「すみません…この豆腐って、具体的にどんな違いが…て!?」

「君は?!雄英の無重力の子」

見つかってしもた!どうする、どうするも何も助けを呼ばんと!この人、オールマイトと渡り合うぐらいめつつや強い!私じゃ敵わん!

「わっ!わあああ!」

思考とは裏腹に私は手を振ってあわあわしてしまふ。あかん。こんなんじゃ…

「大丈夫?!落ち着いて!深呼吸、深呼吸だよ!ほら!」

スーハーと、深呼吸をする緑色の髪の子。つられて私もしてしまふ。

「スー、ハー…」

…うん、落ち着いた。ってそうじゃなくて!

「ごめんね。驚かせちゃって」

こちらへ謝るその姿はとてもUSJで私たちを殺そうとしてきた時と、とても同じ人物とは思えなかった。

「あ、その…今日は、別に買い物しにきただけで…なんというか、その…」

「そ、そうなんや…」

気まずい空気が流れる。こ、このあと何すればええんや…

「ねえ、この豆腐、どっちが身体にいいのかな?ボク、こういうこと詳しくなくて…」

「あーえっと、わ、私はこっちの方が安いし栄養もあると思うよー」

とりあえず、相手を刺激しないように…このスーパーで問題起こさんよう監視しなくちゃ！

「そうなんだ…じゃあ、こつち買おうかな」

買い物カゴに入れられる豆腐。

「えっと、緑谷出久くん…だよね？」

「あ、うん。そうだよ？」

本当にこの前の雰囲気と全然ちやう。まるでどこにでもおる子みたいや…

「あの…聞いていいかな？」

「うん？」

「えっと、爆豪くんとは幼馴染なんだよね…？」

事件後聞いた。爆豪くんとの関係。それを確かめる。

「そうだけど」

「デクって呼んでたけど、それって」

「蔑称だよ、それは。やめてほしいかな」

彼の目が鋭くなる。その目には怒気が孕んでいた。あ、あかん…やつてもうた…

「い、ごめんね…あ、でもー！」

「デクってなんか、頑張れって感じで好きだ！私!!」

思っていたことを彼に伝える。

「え、えええええ!!!いや、その!あの!!」

目に見えて狼狽する彼。手をあわあわさせてる。

「お、落ち着いて!深呼吸!深呼吸!」

スーハーとお互い深呼吸をする。何してるんやろ…私たち。

「はあっはあっ…」

「あ、あはは、ごめんね。変なこと言って」

私の言葉に、彼は、少し思案しながら言の葉を紡いだ。

「今まで、誰かにそんな風に言われたこと、なかったんだ。だから、嬉しいよ。ありがとう

う」

「あっ…」

こちらへ儂げな微笑みを向ける緑谷くん。あ、ちよつと可愛いかも…

「ごめんね、ボクがいたら、やっぱり邪魔だよ。今日は帰ることにするよ」

踵を返す緑谷くん。その背中がどこか悲しそうに見えて…私は!

「待って!スーパーのこと、よく知らんのやろ?なら」

「私が教える!」

「筋肉つきたいの？なら鶏のささみが一番いいよ！」

今、ボクはまさかの女子と一緒に買い物をしている。それも、雄英の生徒でこの前、殺そうとした相手だ。お節介にも程がある。でも、正直すごく、ありがたかった。わからない場所は細かく教えてくれてその知識量には脱帽だ。

「あ、待って。こつちの方が安いよ！」

「本当だ！麗日さん、すごいね！」

「あはは、たいしたことじゃ……」

「ううん……すごいよ麗日さんは。豊富な知識量があって目利きが効いてる。おそらく、一朝一夕じゃ付かない。それこそ日頃から経験してないと……ブツブツ」

「おーい！」

「はっ!?!ごめんね、つい！」

「それ、癖なんだね」

苦笑いを向ける麗日さん。不味い、不味い、気味悪がられたか？何か、言わないと…!!

「あ、えと、癖って言うか、分析するのが好きなんだ」

「へー、そうなんや」

「えっと、今日はありがとう」

ボクの両手にはパンパンの買い物袋が握られていた。麗日さんのおかげで買い物物がすごく捗ったんだ。

「本当に助かったよ」

「ううん、役に立てたんならなにより！」

こちらへ笑顔を向ける彼女。なんと…

「うららかすぎる!!」

そして、もう一つの目的がある。

「でも、実は、ボクの監視も兼ねてたんだよね。ボクが暴れて問題を起こさないように」

それが、ボクの買い物に付き合ってくれたもう一つの理由。

「えっと…それは…」

「ううん。君はヒーローとして、最善を尽くしていた」

彼女はヒーローとして、今できる被害の最小限化。ヴィランへの説得。それを試みて見せた。

「だからこそ、君がヒーローである限り、また会うことになる…その時ボクは…君と戦うことになる」

「今度は…君と戦いたくないな」

本心からの吐露。彼女は何を思うだろうか。

「じゃあね、ボクはこれで」

背を向ける。もう話すことはないと言わんばかりに。

「私が止める！」

「君が悪さするって言うなら、今度は私が止めるよ！」

彼女からの返答に、目を丸くする。そして歩き出す。次会う時は確実に敵だから迷いを打ち消す。

「ふふふ、流石、ヒーロー」

「なら、ボクは…なおさらヴィランとして君に立ち塞がるよ」

それだけを告げて、ワープゲートに身を包む。

「遅かったじゃないか、緑谷」

バーへ帰ってくる。待ちくたびれたとばかりに迎えてくれる弔くん。

「じよ、女子と喋った!」

ボクの頭には、そんなことより、まともに女子と話すことができたことに安堵する。実はすごく緊張していて、何とか抑えていたけれど、それが溢れ出した。

「は?」

案の定、不可解そうな顔をすされる。

「まあ、なんでも良い。腹減った。早くなんか作ってくれよ」

ボクは、包丁を手に持ち、台所に立つ。自分の体に最適な料理を作るために、考えたメニューを作り始める。

「黒霧さん、お願いします!」

「緑谷出久、包丁の持ち方は…」

ハートがマークされたエプロンを着た黒霧さん。いや、エプロンの柄がギャップすぎるよ…

そして変に家庭的な黒霧のレッスンが始まった。

悪意の目指す場所 聖火の継承

世間では雄英体育祭が閉会してからその日の夜、ボクは貸し出された脳無と訓練をしていた。

「ダークネス・カウル！オーバーパワー！」

エネルギーを、スパークさせながら高速で接近する。脳無は翼を広げ空中へ逃げる。跳躍し、追いかける。

「捕らえた！」

脳無の腕を掴み空中で一回転しながら地面に投げる。地に堕ちた脳無に手のひらをかざし、レーザーを連続掃射する。

「ブラックレーザー」

脳無の体をレーザーが無数に貫く。脳無は活動を止め、ピクリとも動かなくなる。

「緑谷出久、流石です。更に磨きがかかっていますね」

「黒霧さん」

「いや、まだまだです。まだ理想とは程遠い…」

あれから、体を作り直して個性に耐えられる上限を高めた。しかし、まだ満足の行く結果は得られていない。もっと内容を厳しくするか？

「お客さんを連れてきました。貴方もお戻りください。」

「お客さん？誰ですか？」

「ヒーロー殺しと呼ばれる、助っ人です」

「ハア…お前は俺がもつとも嫌悪する存在だ」

バーに戻ってきたボクと、黒霧さん。そこには既に一触即発の空気が漂っていた。甲くと男が構え合っている。それを確認した瞬間、男の背後を取り手刀にエネルギーの刃を纏わせ首筋に突きつける。

「っ?!速い!」

「…動くな…一歩でも動けば首と胴を切り離す」

「ちいっ!!」

武器を捨てる男。こいつがヒーロー殺し…

「ヒーロー殺しの誕生にはあるエピソードがある。ヒーロー科の高校に入学するも三カ月で中退。以降は社会に正しきヒーローを、という理想を街頭演説で訴えかけるも、言葉に力は無く淘汰されていく。悟った彼は独学で力を蓄え、ある時、自分が贗物だと判断したヒーローを殺すその行動を英雄回帰として、世に知らしめる。ヴィランの中でも名の通った大物だ。

「緑谷、いい。離してやれ」

「弔くん…わかった」

渋々、拘束を解く。何か考えがあるのか。

「ヒーロー殺し…お前もこの腐った今を壊したいんだろ？思想は違えどゴールは一緒だ。名が上がり続けるヴィラン連合。そこにお前という大物が同盟を組む。メディアは更にお前の主張を取り上げる…どうだ？目的へ近づくと思わないか」

「俺が嫌いなら嫌いでいいよ。でも、俺を見極めるためにわざわざ来たんだろ？だったら……」

「使えるモンは使わなきゃなあ！ヒーロー殺し」

一瞬の静寂。ヒーロー殺し、ステインは彼の冷静な対応に耳を傾けている。

「なるほど、ただのガキではないようだな。ハア…わかった。同盟を組む……が」

「まだ、保須でやり残したことがある」

「構わないよ、チームプレイと行こうじゃないか…先生、脳無貸してくれ」
「わかった弔。脳無を出そう」

先生からの了承も受ける。

「いいのですか死柄木弔。まだ決まったわけではないですが」

「いい、先行投資つてやつさ。黒霧、送つていつてやれ」

「死柄木弔…そこまで…!!かしこまりました」

「では、行きますよヒーロー殺し」

「ああ」

2人はモヤの中へ消えていった。

「緑谷、さんきゆな」

「うん…それで、本当のところはどうなんだい?」

彼の性格は気に入らないものは壊す。思い通りにならないと癪癪を起こす。悪く言ってしまうば子ども大人のような性格だったはずだ。あと寿司を強請る。この短期間で、それが収まりつつある。

「ああ、ヒーロー殺しも、世間も何もかも、たまらなく、ムカついているよ。でも一番ムカつくのは、やつぱり」

「オールマイトだ」

その言葉に含まれた憎しみはボクの腹にずしりとのかかった。

「ヒーロー殺しは有名さ。思想に賛同するシンパもたくさんいる。そして、俺たちは戦力を求めている。あいつがこちら側につけばどう転ぼうがヴィラン連合の名声は上がる。だから、今は我慢する時なんだよ」

「あいつの名声も、思想も、決意も。全て俺たちの踏み台にするんだ」

「弔くん…そこまで考えて…」

「弔、ふふ、嬉しいよ！素晴らしい！」

「先生はそこで見ていてくれよ。緑谷」

「一緒にオールマイトを潰そうなあ!!」

途方もない悪意が、花開く。すごい…凄いよ！弔くん！だからボクも応えなきゃ!!

「一緒に、潰そうね」

笑顔を浮かべる。自分がどれだけ凶悪な面で笑っているのか、ボクは気づかなかつた。

「よし、じゃあ、様子でも見に行こうか…」

「ヒーロー殺しの生き様ってやつを」

まるで、遠足に行くかのように、ボクたちは笑いながらモヤの中へ歩いていった。

「雄英体育祭、一位おめでとう!!少年…それで、話って何かな?」

俺は今、オールマイトと向かい合っている。いつ見てもその高い壁は俺に現実を突きつける。お前はまだまだ下にいるのだと。

「俺に修行をつけてくれ」

超強力なパワー。高速移動を可能とするスピード。遠距離からでも攻撃できる手段に、特大のエネルギー波。あいつはどういうわけか、個性を使って俺を地に沈めた。しかも、あれでいて全力ではなかった。舐めやがって…とも思うが、それだけ自分の力が足んねえことを知った。だからNo. 1から学べるものを学ぶ。

「あいつのことだ。デクの…緑谷出久のことだ」

「聞いたよ…たしか、彼とあの少年は幼馴染みだったね」

幼馴染み。その言葉は違う。俺にとってはそうでも、あいつにとってはちげえんだろ
う。

「あいつの母親に、全部話した。そして、誓った。あいつを俺が連れ戻すってな」

「だけどここで、頂点を取ったって、まだまだ全然力が足んねえ。あいつはあんたと渡り
合うぐらい強くて、そして、俺はクソ弱かった」

「爆豪少年が自分をそう評価するのは初めてだね?」

ああ、いつもの俺なら、それでも俺のがつええって虚勢を張っていただろう。

「…んだよ? 認めなくちゃなんも始まんねーだろが。あいつを連れ戻すと決めた。何が
あつたってな」

拳を握り、爆破をかける。

「少年…!? そこまで…!! 最近おとなしかったのはそういうわけか…!」

「私は君を見誤っていたようだ…話を聞いてくれるかい?」

オールライトからの話。その度肝を抜く前提の話に俺は驚愕した。

「つまり、あんたがデクを否定して、ヴィランになったと」

「そういうことだ、少年」

「その話はわかった。それで、俺に」

呼吸を整える。この先の真実に。

「OFAを継げってか」

オールマイトは5年前のある事件で重傷を負った。胃袋全摘、呼吸器官半壊。度重なる手術と後遺症で活動時間が少なくなり、本当の姿は痩せて骨と皮だけの体になってしまったことを伝えられた。

「私は元々、後継を探しに雄英に来てね。そこで入試で不器用ながら麗日くんを助ける君を見た。君は良くも悪くも見返りも何も求めず、お節介をした。君のヒーロー像はあの時から一緒!!…しかし、決められなくってね」

「OFAは正しき心の持ち主に渡すべきだ…君の自尊心の高さ…：褒められたものじゃないそれを見て、とてもじゃあないが、後継には出来なく、惜しいと思った」

「でも、今の君なら、この聖火の如く受け継がれてきた力を正しきもののために使えるはずだ。どうか…少年？受け取ってくれるかい？」

そんな、提案、鼻っから受けるにきまつてんじゃねえか！

「たりめえだ！デクは俺が連れ戻して救う。あいつの母親も救う。全部だ。全部救う！

「だけど、肝心の力が足んねえ……だからオールマイト」

「あんたの力を受け継いでやる！」

オールマイトを睨みつける

「いい返事だ！とても大胆不敵で君らしい！では」

「食え」

髪の毛を差し出される。は？いや、まてどういうわけだ。

「は？はああああ！！！」

俺の叫びが部屋に響いた。

「そういえば君、まだ職場体験先、決まってないだろう！」

「私の師匠の師匠がいてね……お年は召しているが、OFAにも精通している。実力も

……じ、実力も折り紙付きだ……」

あのオールマイトが震えてやがる。どんだけ強えやつだよ。

「この力を使いこなすには、それが一番早えつうわけか」

「ああ、その通りさ。なりふり構っていられない……そうだろう!?!」

ああ、俺はもう振り返らない、過去なんざ捨てた。なら、答えは決まっている！

「上等…!!その職場体験!!やり倒してやる!!」

「誰だ君は？」

目の前にはボケた老人が立っていた。俺が雄英から来たつつつても、話を通じず名前を教えても、この返しだ。間違いなく、ボケつくしてやがる……

「誰だ君は？」

「駄目かもしれねえ……」

俺は、この後のことを想像して、なんと説明すりやいか頭を悩ませた。

それぞれの職場体験。

「俺は、一刻も早く強くならなきゃいけない。オールマイトがあんたの教え子だとしても、耄碌ジジイに構ってる暇はねエ。邪魔したな」

踵を返す。どんな強い奴に会えるかと思ったら、このザマだ。オールマイトも、なんで……！

その瞬間目の前を高速で飛ぶジジイの姿があった。ジジイは変幻自在に空中を飛び回る。速くて目が追いつかねえ！

「ならかかってきなさい」

こちらを見据えるジジイ。やっぱ間違つて無かつたじゃねえかよ。

「分かりやすくしてどーも。んじやまあ……」

強敵の出現に顔に笑みが浮かぶ。俺も爆破で飛び掛かる。俺も空中戦は慣れてんだ。

「試させてもらうぞ。ジジイ！」

「へっ。威勢の良い小僧は嫌いじゃねえ。来な!!」

俺は爆破して近づく。しかし、その瞬間に姿が掻き消える。どこに……と思った瞬間にはもう後頭部を蹴られていた。

「ぶっ!？」

「ちんたらしてると、おっ死ぬぞ!小僧!」

野郎…あれが最高速じゃなかったのか…!なら、これならどうだよ!

OFAと爆破の個性を拙いながらも混じり合わせる。そして生まれる特大火力。

「全方位爆破ア!」

両手から、激しい爆破がほほほほノーリスクで放つ。これが、オールマイトの個性…!! 煙幕が出ている間に壁際へ寄る。

「回避されるとは思わなかったか?隙きだらけだ!」

こちらへ目掛けて蹴りを放たれる。が、しかし。

「ばーか、後ろさえ取られなきや」

両手が光り、広範囲の爆撃がジジイに襲いかかる。

「やりようはある…!!」

煙幕が晴れるとそこには無傷のジジイがいた。近距離で撃つたはずだ…!回避能力も半端じゃねえ!

「やるじゃないか、小僧」

オールマイト!ずいぶん強えジジイ紹介してくれたなあ!!

「あんたもな」

俺はジジイに向けて爆破を叩き込んだ。

数分後地面に倒れ込む俺。あのジジイのトップスピードになんとか、食らいつきながら、爆破を起こす。怯んだら突っ込み、ジジイにゼロ距離で爆破させるが、躲される。代わりに振るわれる蹴りやパンチを見極めながら回避するも避けきれなかった攻撃がダメージになり、倒された。

「テメエの個性は俺と似たような動きをする。なら、やることは一つだ」

「まずは、俺のスピードについてくることだ。そしてOFAの制御も並行してやれ。調整自体は形になっておる。そして」

「自分の上限を見極めながら「30%だ」

「俺の今の上限は約30%。それ以上は体がもたねえし、爆破と合わせられねえ」

「この俺が、テメエと戦ってる間、ただ食らいつくだけだと思ったか？」

自分の個性の把握すら満足に出来ねえでどうする。そんなんじやオールマイトに泥塗っちゃうだろが」

立ち上がり両手に小爆発を生み出す。

「こいよ、ジジイ！まだ全然効いてねーぞ!!」

ニヤリと笑うジジイ今すぐぶっ倒してやる。

「俊典の奴…中々骨のある奴を連れてきおつたな」

(これは、忙しくなりそうだ…)

「お前がウチの事務所を希望するとは思わなかった。やっと下らん反抗期から抜け出したか」

あいつの体から放出される炎に空気が歪む。ユラユラと揺れる炎はまるで俺の心情を表しているようだった。

「わかんねえ。けど、あいつに…爆豪に右だけで完敗してからわかんなくなっちゃった」

「つまりん意地を張るから。そうなるのだ。焦凍よ」

「いいか!? お前は完全なのだ! 俺の上位互換としてな! その気になれば、あんな爆発小僧…完封出来るスペックすらある!!」

「またその話かよ…!! クソ親父…!」

腹の底から怒りが込み上げる。だから、俺はテメエの傀儡でもなんでもねえつつつてんだろ。いい加減にしろよ…!!

「テメエが憎い…!!」

お前が俺たちにしてきたこと。母さんにしてきたこと。忘れたとは言わせねえ…! 今ここでコイツを右だけで否定してやる…!

右手を振るい、氷を生み出し親父にぶち当てる。しかし。親父は俺よりも何倍の規模の炎で氷を一瞬で蒸発させる。すかさず、もう一度放つも。無効化される。

「強大な個性にかまけて、扱いが大雑把だ! 焦凍オ!!」

腹部に拳を叩き込まれる。胃の中のモン、全部でちまうぐらいの衝撃が俺を襲う。

「いっふっ!」

たまらず、膝をつく。ああ、あの時と同じだ。こちらを見下ろす奴のつめてえ目…俺は、こんな奴になりたくなくて…!!

「しばらくそこで頭を冷やしておけ」

親父は訓練所から出て行く。

「待ちやがれ…!!」

俺の声は虚しく消えた。

記憶の中の母さんはいつも泣いていた。俺が個性を出してから、あいつは俺を虐待紛いに鍛え始めた。嫌がる俺を掴むクソ親父。それを止める母さん。そして、クソ親父の手が母さんをまるで邪魔だと言わんばかりに叩いた。

「焦凍…お前の左側が…憎い」

そう言っつて母さんは俺の左側に煮え湯を浴びせた。あの時から、俺は…!!

「いつけねえ…。寝ちまつてたのか…俺は」

目を覚ます。体には、毛布がかけられていた。冬美姉さんか…?

訓練所から出る。硬い床で寝ていたためか、ひどく体が固まっていた。

「焦凍。訓練は終わったの?」

訓練。あれが訓練と呼べるものならな。

「ああ、姉さん。姉さんが俺に毛布を?」

「え? ううん。私じゃないよ?」

「じゃあ、一体誰が…?」

毛布に視線を落とす。そういえば、心なしか、焦げてるような…まさか!?

エンデヴアーヒーロー事務所。某部屋では…

「焦凍オオオオオ!!風邪を引くんじゃないぞオオオオ!!」

「また始まったよ。例の発作」

「どっちが意地張ってんだかねえ?」

男の叫びがこだましていた。

ボクは自らの腕を個性許容上限を、オーバーしたパワーで自分で殴りつける。

「ぐううううつ!!!」

紫色に腫れ上がり変色する右腕と、叩かれて左腕が折れる。そして、エネルギーを活性化させて、治療を施す。

治つたらまた、同じ繰り返し。かれこれ30回以上繰り返すこの行為。辺りには夥しい量の血がボクの体から出ていた。

頑強な肉体を作る最適解。ボクはそこに辿り着いた。健康的な体を作り、自分の体調をコントロールして良い状態に保つ。自分の個性で体をぶつ壊して、次はそのパワーを耐えられるように体を活性化させて治療する。応用が効くボクの個性ならではの使い方!!!

「これだ……この方法なら……!」

「オールマイトも敵じゃないや!」

流れる血が心地良い。この状態で超思考も発動する。

「つ……えつ……?」

頭の中で今、一枚のガラスが割れる音がした。そんな、違和感。しかし、すぐその感覚は通常に戻る。

「何だったんだ…今の…」

明らかにおかしかった。何かが無くなる感覚。

「ボクは一体何を」

「忘れてしまったんだろうか」

「それにしてもAFOも酷なことをするのう」

達磨のような体型をした男、ドクターと呼ばれる男が呟く。

「こんなに健気に個性に耐えられる鋼の肉体を造っているというのに」

「使えば使うほど脳の能力が強化されるが反動で記憶が消去される個性に」

「エネルギーを生み出すため自らの心を薪にし、火にくべる個性…」

「そして空っぽになった、大きな器に」

「憑依しよう…だなんてなあ…カカカ」

悪魔が嗤った。

ヒーロー殺しステイン

夕日が沈みかけ、空には茜色の空が見える。落ち着いた街並みに一台の新幹線が過ぎ去ってゆく。俺は今グラントリノのジジイと一緒に新幹線に乗っていた。

職場体験2日目、ある程度個性使用に慣れたものの、ジジイとばっかやり合っても癖がついて良くないつつうわけで、ヒーローのお仕事、ヴィラン退治のために渋谷へ向かう、だそう。

「ジジイ、まだつかねえのか」

退屈すぎて頬杖をつく。

「もう少しだ。我慢せい受精卵小僧」

OFAを継承し、俺の個性に対する考えを改めた。今までは増強系だろうがなんだろうが結局は俺の爆破が一番凄くてカッケェんだって思っていた。だが、真に必要なものは、使い手を含めた力量を見極める目だった。

個性は手段でしかねえ。

使い手によって、それが大きく変わり複雑化していく。俺がオールマイトから受け継いだOFAでオールマイトと同じことをしろ、と言われてもそう簡単には出来ねえ。ま

ず体がぶつ壊れる。だから身体能力をOFAで強化、さらに攻撃時は爆破を掛け合わせで、今までの火力を鼻で笑えるような威力を出せるようになった。

どんな個性でも、連携されれば。ウゼエ使いかたされたら、脅威になる。没個性だからと舐めていたら足元すくわれました、じゃ話になんねえ。まずは相手の個性を警戒していくようにした。

「列車が緊急停車します」

アナウンスが鳴る。なんだ、何かあったのか。

「おいジジ」

言い切る前に新幹線の壁が破壊される。脳味噌剥き出しのUSJで見たヴィランみてえなやつが入り込んできやがった。

「お前はじつとしていろ！」

ヴィランを列車外に追い出し自らも出て行く。こんなわけワカンねえ状況でじつとしてるなんざ、無理だった。幸いヒーローが駆けつけてきた。なら俺がいなくても問題ねえよな？

列車を飛び出し、OFAで強化した足で走る。あのヴィランがいるってことは、ヴィ

ラン連合が来てるかもしれないねえ。デクの野郎がいる可能性がある。

狭い、路地裏。時には屋上へ登り空から俯瞰。あいつがいる痕跡は何かねえか？
路地裏を走り回り、俺はある光景を目撃する。

「クソメガネ、こんなところで何して…ッ!？」

「爆豪くん!？」

クソメガネ…飯田天哉が倒れている。その前には、刀を持ったヴィランがいた。テレビで見たことがあるその風貌。

「おいおい…ヒーロー殺しがなんでこんなところにいやがる」

冷や汗が顔から垂れた。本物のヴィランとの邂逅。

「爆破ア!!」

上空へ爆風を広げる。こんだけ派手にやりや、ヒーローの奴が様子見にくるだろ。

「ハア…俺はそいつを殺す義務がある。死にたくなければどけ、ガキ」

殺意を肌で感じる。これが、プロの現場…!!本物のヴィラン…!

「この状況見て、はい、そーですかなんて言うかよ、ボケ」

「爆豪君!逃げてくれ!こいつに斬られると行動不能になる!」

クソメガネからの助言。拘束系か。

「役立たずがほざいてんじやねえ。もう1人重傷者がいるだろうが。見殺しにしろっつか、ああ!？」

壁際によりかかる男。おそらくヒーローか。

OFAで体を強化し構えを取る。どこから攻撃が来てもいいように。目的は、ヒーローがここに来るまでの時間稼ぎ。又はあいつを遠ざけて、2人を抱え離脱。無理に倒す必要はねえ。時間が解決してくれる。

「ハア…お前は…生かす価値があるな…!」

「上から目線で物言ってんじやねえよ。倒してから言え」

「ニイツ…そうだな…!」

俺の挑発を受けこちらへ駆けてくるヒーロー殺し。その速さは普通の人間を超えていた。しかし…

「おせえ!A・P・シヨット!!」

どんだけジジイの蹴り喰らってきたと思っただやがる。その程度のスピードじゃ、俺には近づけねえ!

怪我人がいるために路地裏を埋め尽くす爆破は使えねえ。しかし、被害を最小限にするために、開発した技を放つ。

しかし、まるで立体的に動き躲すヒーロー殺しには当たらなかつた。
刀を振りかぶる。

「オラア!!」

目の前でゼロ距離爆破。この狭い路地裏じや範囲攻撃がある俺に利がある。
爆風の中から風切音!!

しゃがんでかわし、距離を取る。

「あつぶねえな!!」

もう少しでかするところだった。爆破を受けたダメージの中動いたつてか?

煙幕が晴れ、決して軽くはないダメージを負っているが、ヒーロー殺しは健在だ。

「ハア…緑髪のがキもそうだが、近頃のがキは強い…」

こいつは、脳無と同じタイミングで襲撃をかけている。ヴィラン連合とも繋がっているはずだ?

緑髪の強いガキ…ということはあいつの可能性がある。

「お前、デクのこと何か知ってんだろ? そばかすが付いた野郎だ」

ヒーロー殺しへ尋ねる。あいつの情報はあるべく手に入れなきやなんねえ

「ハア…おそらく、お前の言う条件とは合致している」

「はっ、そうかよ」

そういうことならば話は早い

「時間稼ぎはやめだ。テメエに聞きたいことができた。ぶつ飛ばしてからじっくり聞かせてもらおうぞヒーロー殺し！」

まるで忍者のような体捌きで、俺の爆破を躲し接近される。こいつに接近戦は自殺行為だ。だが怪我人が居て範囲攻撃ができない分、こいつへの対応が後手に回っちまう。

振りかざす刀。回避だ！

「爆豪!!」

目の前に氷が発生し、ヒーロー殺しの体を凍らせる。突然の乱入者に警戒し距離を取られる。

「舐めプ野郎……」

後ろには、氷と炎を扱う個性。轟焦凍がそこにいた。

「わりい遅くなった」

「ちっ…舐めプして勝てる相手じゃねえ。使わねえんならテメエはあそこに倒れてるヒーローとクソメガネ回収して後ろに下がれ。」

「そしたら、思いつきりぶちかましてやるからよお…!」

「俺は…いや、わかった。頼んだ爆豪」

「轟君まで…もう、もうやめてくれ!」

クソメガネがごちゃごちゃと声を上げる。俺の問題だ、だとか君たちを危険に晒すわけには…だとかいらねえことベラベラ喋りやがる。

「ごちゃごちゃうるせえんだよ。クソメガネ! 黙って救われとけや」

「ハア…仲間会議は終わったか? 時間が無い。そろそろそいつを殺させてもらう」

待っていたと言わんばかりの接近! OFAの出力を30%に引き上げ。髪が逆立ち、橙色の燃えんばかりの輝きを見に纏い、迎えうつ。

「速い!」

こいつが、斬ろうとするよりも速く攻撃を叩き込む。そして爆破で吹き飛ばす。

「今だ! 舐めプ野郎!!」

倒れているヒーローを回収する。これでいい。これで最大火力が撃てる。

「流石のヒーロー殺しでも、この路地裏を埋め尽くす爆破を、避けれんのかよ!! ええ!!」

片手を突き出し狙いを定める。籠手に溜まった汗。そして掌の汗腺を刺激し、OFAで強化された特大の爆破の両方を撃ち出す。

「ぶつ飛べやああああ!!!」

一瞬辺りが輝いたかと思うと、凄まじい轟音を出しながら迫る爆発。

その爆破の奔流はヒーロー殺しを呑み込んだ。
「すげえな…あいつは」

風圧がこちらに流れ込み、煙幕が立ち込む。流星に倒した…とは思うが念のため警戒をする。

そして、煙幕が晴れ倒れ伏したヒーロー殺しの姿がそこにあつた。俺は油断なくあいつに近づき、武装を解除する。

「おい、何か縛れるモン持つてるか？」

ヒーロー殺しとの戦闘は終わった。懐に入られたらやべー相手だったが、爆破で近づくにくい有利対面の上に、あいつは本気をだしては来なかった。だから最後に回避不能の攻撃を叩き込むことができたが、純粋な接近戦に持ち込まれていたら、負けていただろう。

「本当にありがとう。爆豪くん、轟くん…!!」

「俺は怒りで周りが見えていなかった…俺はヒーロー失格だ…」

涙を流すクソメガネ。こいつにはこいつの事情があつたんだろう。

「何があつたかは聞かねえ。興味もない」

怒りで周りが見えてない奴の顔はよく知っている…俺も、舐めプ野郎も。

「俺だつて怒りで飛び出しちまうことはある…そんだけだ!」

「爆豪くん…! きみは…!」

「爆豪は気にすんなつて言つてんだ」

隣で聞いていた、舐めプ野郎が何か言いやる。

「言つてねえよ! おい勘違いすんなよクソメガネ! あと、舐めプしてたくせに話しかけてんじゃねえよ!」

「悪い…また左を使うか迷つちまつて…それで…迷惑かけた」

「んだよテメエら! ジメジメした雰囲気出してんじゃねえ! 燃やすぞコラ!!」

「テメエの力だろうが。使えるモン使つて何が悪いんだこのクソ舐めプ野郎が」

「迷惑かけたつて思うんなら、次は使えバカ野郎」

背を向ける。別に気恥ずかしくなつたからじゃねえ。慣れないことを言つたからでもねえ。ムカついたからだ! それだけだ。

しばらくして、ヒーローが駆けつけた。

「焦凍オオオ!!!」

暑苦しい、No. 2ヒーローが奇声を上げながら近づいてくる。憎いだとか、なんとか言っていたが、あれはなんとなく別の意味で憎いな。あいつも苦勞してんなって思った。

「小僧、何でここにいやがる!」

ジジイに頭を蹴られる。これは命令を無視したから甘んじて受ける。

「いつてえな!ジジイ!ヒーロー殺しが居たんだよ!」

「なに?こいつは!」

グルグルに縛り上げられたヒーロー殺しを見せる。

「それより、クソメガネの出血がひどい。先にそっち優先だ」

「全く:勝手に飛び出して行く所は俊典譲りか」

「オールマイトを超えんだよ。それくらい出来て当然だ」

何かに体を掴まれる。その瞬間。浮遊する体。こいつは脳無!!

爆破で倒そうと思った時、突然脳無の動きが止まり、目の前を黒い影が通り過ぎる!

「偽物が蔓延るこの社会も:悪戯に力を振りまく犯罪者も:i肅清対象だ:!!」

脳無を地に墜し、隠し持っていたナイフでトドメを刺すヒーロー殺し。

「全ては正しき社会のために……!!」

立ち上がり、駆けつけたヒーローを睨みつけるヒーロー殺し。体は爆破のダメージで動けないはずなのに、鬼気迫る表情で迫る。

「エンデヴァー……!!ニセモノ……正さねば……!!誰かが血に染まらねば……!!」

空気を一瞬で変える、その体から溢れるプレッシャー。誰もが動けなかった。動くことを忘れた。

「ヒーローを取り戻さねば……来てみる偽物ども……」

宣言する。

「俺を殺していいのは……オールマイトだけだア……!!」

俺は震えていた……まるで産まれたての小鹿のように震えた。こんな奴が……どう見ても破綻しているのに、こんな想いを持ったヴィランに臆した。

不意に金属音が響く。足から先が冷たくなって、息も忘れるようなこの場所に似つかわしくない音が嫌に大きく響いた。

ヒーロー殺しが落としたナイフの音だ。

「気を、気を失ってる」

誰かが呟いた。立ったまま気絶してやがる。

「あーあ、嫌だ嫌だ。最後に脳無は殺されてるし。信念がある男は怖いねえ」

一連の流れをビルの上から見ていたボクたちは、作戦が失敗したことを愚痴りあつた。

「あの、ヒーロー殺しを倒した子。強いね。でもどこかで見たような……」

「あ？幼馴染みって言つてなかったか？」

弔くんから変なことを聞かれる。ボクが彼と幼馴染み？いやいや、ボクはヴィランで彼はヒーローだ。そんなはずがない。

「そうだっけ？いや、知らないよ」

「そうか？まあいいや」

「ヒーロー殺しがヴィラン連合との繋がりがあることを知らせれた。そして、かつこいい彼の想いは伝染する」

「来るはずだ。あいつを慕って集まる強力な戦力が」

「目的は達成したってわけだね」

「ああ、踏み台にすることは出来た。惜しむらくはヒーローを殺せなかったことかな。上手くないかねやっぱり」

ボクはこれから来るであろう大きな戦いに身を震わせた。集まるヴィラン。世の中を破壊する狼煙を上げないとね。これは忙しくなるぞ…!!

「行くよ、ヒーロー。ボクたちが壊しに行く」

輝く月を背中にし、ボクたちはワープゲートのモヤの中に消えて行く。

暗い路地裏をスキップする。まるで踊るような軽さはこの場に似つかわしくなく、彼女の心を表していた。制服には返り血がついておりナイフが握られていた。彼女の後ろでは、血溜まりが作られていた。

「ヴィラン連合…わたしも入りたいです！」

可愛らしい顔立ちに狂気を感じさせるまでの笑みを浮かべる。どこから、どう見てもまともじゃないその純粹な目は、喜びに満ちていた。

彼女の想い

椅子に座り、コトの顛末を見守る。

「紹介料は頂くよ。黒霧さん」

「大物ブローカー義蘭、彼らが」

彼の後ろに控えていた2人のヴィランが姿を表す。

「片や、連続失血死事件の容疑者。未成年故にご丁寧にメディアが顔を守っている」

「トガです!!トガヒミコ。生きにくいです…生きやすい世の中になってほしいです!!ス

テ様になりたい!ステ様を殺したい!!」

「これは…」

「おいおい、破綻者かよ…お守りは嫌だぜ、大物ブローカー」

「この子をヴィラン連合に入れていいものか悩む。まともに会話が通じないんじや足手纏いだ。」

「会話は一応通じるさ。もう1人が…」

「ステインが協力していた組織だっていうから来てみれば…」

「こんな、手生やしたイカレたガキがリーダーかよ」

継ぎ接ぎの皮膚を貼り付けた男。初対面の弔くんに対して茶毘が口を開けば、出てくるのは嘲りの言葉。本当に何でこんな奴を連れてきた。

「お前はそこの破綻JKが出来てることすら出来ていない。名を名乗れ」
弔くんもよく耐えているが、呆れながら対応している。

「茶毘で通してる」

「通すな、本名だ」

「時がくれば話す」

それだけ言っつて、踵を返す。ハズレだったかな…？

「そういえばあ…あなた…美味しそうな血の香りがしますね！」

こちらにずいっと近づくとトガヒミコ。顔と顔が触れそうなぐらいの距離でまたぞろよくわからないことを言い放たれる。

「近い…離れてくれないかな？」

「そもそもボクは君を認めていない。君みたいなただの欲求だけで動く考え無しの間人を仲間とは認めない」

ボクの言葉にトガヒミコは、何が嬉しいのか、笑顔を浮かべる。

「えへへ…お話、たのしいねえ…!!」

想像通りのイカレ具合だ。相手をするだけで、訓練より疲れる。

「はあ…ちよつと外行つてくるね。弔くん」

「ここにいたら、頭が痛くなつてくる…」

立ち上がり、バーを出す。こういう時は外の空気を吸うに限る。そうだ。新しく出来たシヨツピングモールに行こう。オールマイトの限定グッズが出ているらしい。

「ああつ…待つてくださいい！もつとお話しようよ!!」

後ろからかけられる言葉を無視して外へ出る。

「で、何でついてくるのさ」

しつこいことに、外まで付いて来て、横を歩かれる。近い、肩が触れ合いそうだ。

「どこにいくんですかあー？私まだあなたの名前知りません!!」

「知らなくて良いよ。ボク、君に興味ないから」

イライラする。いや、落ち着け。ついて来るなつて言うだけだ。しかし、仮にも紹介

された人間だ。こいつを街中に放てば何をするかわからない。捕まってヴィラン連合の情報を漏らされたら厄介だ。

「えー!!ひどいです!わたし傷つきました!!」

「はあ…めんどくさい…」

心の底から思ったことを伝える。それを聞いた彼女はふくれっ面になり、ボクを非難する

「駄目ですよー!女の子にそういうこと言っちゃったら」

「心配しなくとも、君以外には言わないよ」

だから、少しバカにしたようなニュアンスを含めて答える。答えてしまった。さらに彼女を乗らせる一言になってしまった。

「わたし…以外…!!」

ボクの言葉を都合よく捉えるイカレ女子高生。別にそういう意味で言ったんじゃないんだけどな。

「えへへっ…!わたし以外には…!!わたし以外には!!」

無駄に、以外を強調される。ここまであけすけに好意を向けられて、付き纏われて確信する。この子…絶対ストーリーカーとかやってくるよ…

仕方が無い。あまり視界に入れず目の届くところに居てもらおう。

「今からショッピングモールに行くけど勘違いしないでね。ボクは君を街に1人で放り出すと、すぐヒーローに捕まえられてヴィラン連合の情報を吐かされるのがオチだと思うから連れて行くけどね」

「守ってくれるんですかあ!」

「守らない。ボクの邪魔をしないこと。ボクの目の届かない所にいかないこと。そのお喋りな口を慎むこと。あと話しかけない。これだけはやってくれ」

「それじゃ、つままないのです!」

無視する。返答は聞かない。彼女を振り切るように早歩きをする。なんとか歩いてこれるぐらいの速さで歩く。

「追いかけてください! 待ってください!」

はあ、これから先のことか思いやられるよ。と相も変わらずぺちやくちやと話しかけてくる声は無視して、そう愚痴った。

「このマッチョなおじさんが好きなんですか？」

ショッピンングモールの中のオールマイト専門店。新しく開店した店にボクたちは居た。

「おじさんじゃなくて、オールマイトだよ」

「この、新しいデザインのコスチューム。一体どこの企業が開発したんだ？ブツブツ」
「むー……ここ、つまらないです」

彼女は店を出た。でも、ボクはそれに気づかなかった。

「やっぱり、ここかくー！っと、トガヒミコ、ボクの目の届かないところには……」

周りを見渡す。どこにも彼女の姿は無かった。

「いない!!」

ボクは彼女を見つめるべく走り出した。

「このチョーカー……カアイイです」

わたしはショーケースの中のチョコレートをしつと見つめていました。

あの人が、おじさんに夢中になつてゐる間に店を抜け出しました。相手の視界から消えるこの技術を使って気づかれないように。

わたしは、生きにくい世の中がやなだけなのです。だって、わたしが初めて好きなのに出会つた時、周りは気味悪い物を見るような目をするんですもん。異常だ、と周りには言いました。だから、我慢して普通を演じてました。

でも、駄目でした。わたしは普通の人になれませんでした。血が好きで、ボロボロな人が好きで、その人の真似をしたい！その人になりたい！殺したい！！

だから好きな子の血を吸って、逃げるように街を出てしばらくして、街頭のモニターで見た。ステ様の姿は綺麗に思えました！

ステ様になりたい！殺したい！

そう思って、ヴィラン連合の門を叩いたのです。その時、緑色の髪をした男の子に会いしました。運命でした！

鍛え上げられた体。意思の強そうな瞳。背はわたしと同じくらいだけど、その身にはとても、濃くて嗅ぐだけでクラクラしちゃうような血の匂いを放つ彼。きつと沢山、血を流す素敵なことをしてきたに違いありません！

「トガヒミツ！！」

わたしを呼ぶ声がします。声の主が駆け寄って来ました。おそらく、わたしがいなくなつて焦つて走つて来たのでしょう。わたしを見るなり、その顔が怒りに染まります。えへへ……そんな顔もするんだあ！

彼は最初に会つた時、開口してすぐわたしが考え無しだから認められないつて言つてました。魅力的な人にそんなこと言われて少し、寂しかつたのです。つい困らせたくなつちやつただけで、そこまで、怖い顔させたかつたわけじゃないのです。

「駄目ですか……？ やつぱりわたしのこと、認められないのですか？」

あなたも、あの人たちと同じように否定するんですか。

「わたし、たしかに考え無しです。でも自分の気持ちに正直に生きていただけです。でも、周りが許してくれなかつた。否定されました」

「なんでそんな気持ちの悪いことを考えつくんだ、つて言われました。ただ血が好きなのだけなのに。だからわたし」

「この社会、嫌いです。壊したいです」

彼女の心の中の想いを聞いた。ああ、ボクと一緒にじゃないか。ゴミみたいに否定されて、自分の居場所を求めて進むその姿。

言葉に詰まる。彼女に伝える言葉を探す。でも、いくら探しても良い言葉が見つからない。ボクのおやふやな原点。それを見定め、必死に言葉を紡ぐ。

「トガヒミコ」

ボクはバカだ。

「ボクも、君と一緒になんだ。ボクも周りにゴミみたいに否定されて、ここに居る」

無個性はヒーローになれない。普通に。常識的に考えて。

彼女も周りに血が好きなのは異常だって言われた。普通じゃないって。

普通って、なんだよ……！

「決め手はオールナイトからの否定だったけれど、そのボクが」

否定をされた。打ち砕かれた。でも、彼女は自分がしたいことを優先した。普通に染まらなかった。自分を貫いた。

ボクは諦めた。

「彼と同じように君を否定してしまった」

怒りも燻っていたイライラも消えた。

何故だか、彼女がとても尊い存在で綺麗だ……って思った。

「ごめんね。ボクの名前は緑谷デク！もう怒ってないよ。許してくれないかな？」

ボクの謝罪に、目を大きく開かせ、笑顔になるも、目を逸らす。

「ちゃん付けしてくれないと、許しません……」

ちゃん付け!?

女子にちゃん付けなんてしたことがなくて、気恥ずかしくてどもる。

「えっ、えと、その……」

期待に目を向ける彼女。

「ごめんね。トガちゃん」

「一緒にこの社会を壊そうね」

「はい！デクくん！」

その言葉を聞いた時の、彼女の可憐な笑顔に、ボクの心臓が高鳴る。

この日のことはたとえ、何があっても忘れないだろう。

「そういえば、トガちゃん。そのチョーカー、いつもつけてるけどさ、

イケてるね！」

ヴィラン連合の名前が超常解放戦線になったある日、仁くんに、チョーカーを褒められます。えへへ、カアイイですよ。これ。

「えへへ……これは、彼からの大切な贈り物ですから！」

「うわ！ 惚気?! 妬けるねえ。妬けねえ!!」

ずーっとつけていると、彼と一緒に居ることを感じられるのです。

彼が頬を染めながら、慣れない手つきでわたしに付けてくれた、このチョーカー。

随分前に離脱してしまった、彼の分までわたしがこの社会を壊すのです！

ダイナマイト

小さなバーに12人が集まる。各自、席に着くか、壁にもたれたり、様々な思想を持ったヴィランが一堂に会した。

「えー、本日は皆さん集まっていたいただきありがとうございますー!」

「ボクの名前は緑谷デク。ヴィラン連合の最高戦力です。今回皆さんに集まっていたのは、今日結成された、ヴィラン連合開闢行動隊の

親睦を深めるためです」

「このお料理、全部デクくんが作ったんですか!?女子として嫉妬しちゃいます…」

それぞれの机には、12人分の腹を満たすための色とりどりの料理が載っていた。ボクの上がりにながった料理の腕はもはや、そこらのシェフと競っても遜色ない仕上がりがだ。

「乾杯をいたしますが、未成年のマスタード君とトガちゃんはお酒飲んじゃ駄目ですよ。ボクも飲みませんけど」

「えー!?そんなあ…」

「当然だね。法は守らなくちゃ」

「ヴィランに法もクソもねえだろ」

「たしかにヴィランの最高戦力が法を守るってどんな状況よ」

「肉…肉…！美味しそう…！」

「緑谷、お前増強型だろ？血イ見せ合おうや！！」

「マジツクに興味ないかい？」

「全てはステインの意思のままに」

「やるな！最高戦力！美味そう！」

「黒霧…騒々しい」

「死柄木弔、これも必要なことです」

「また、お酒を飲める方も酔った勢いで暴れたりしないで下さい。手荒な真似はしたくないです」

個性を発動させて威圧感を放つ。あらかじめ、間違いが起こらないように。

しん…と鎮まり合う店内。…よし。大丈夫そうだ。

「では、皆さん。グラスを持って」

「乾杯！」

グラスとグラスがぶつかり合う音が響いた。

「デクくん！デクくん！あーん」

司会が終わるなり、トガちゃん椅子を持ってきて隣に座ってくる。ぴつたりと椅子と椅子をつけてボクに、男なら誰だつて一度はされたいことNo. 1！あーんをしてくれる。

「い、いや…その、今は…みんな見てるし…」

顔が真っ赤になる。今それはまずい！

「自分に正直になりましょう！デクくん！ほら！」

差し出されるフオーク。小さくいただきます…と言いながら口に入れる。

「認めないとか言っておきながら帰ってくるなり熱々のカップルだよ。爆発しろよりア充が」

首をガリガリと掻きむしる弔くん、ごめん。

「死柄木弔が羨ましがっている…」

黒霧さんもそんなこと言わないで弔くんを止めてあげて…。

「ヒューヒュー！熱いねえ！いや、冷たいだろ！」

「緑谷！別の意味で血イみせろや!!」

トウワイスとマスキュラーのやじが入る。血イみせろって便利だね!?

「つたく、ガキの同窓会かよ」

「まあまあ、緑の坊やは置いて私たちは大人にいきましょう」

「ふむ…こんなマジックはどうだろうか？」

大人組は、互いに酌をとりながら親睦を深め合う。

「同じ未成年なのに、なんでこんな差がつくんだ…!? 学歴が違うのか!？」

「お前は何しにきたんだ」

申し訳ないけれど、1人になってしまったマスタード君とあまり周りと関わらないス
ピナー。意外な組み合わせだ。

「肉…肉…!」

ひたすら肉を頬張るムーンフィッシュ。大人しくしてくれてよかったよ。本当に。

随分と大所帯になって、喧騒を増したヴィラン連合。この前まで3人だったのに。一
瞬だったけれどステインも入れて4人か。

互いに思想を持ち合わせて仲間と協力しながら一緒に動く。ボクは心の中でずっと、
こんな日が続けばいいな…と思った。

「雄英で行われる林間合宿。そこでこの写真の生徒、爆豪勝己を拐う。先生からの指示だ。こいつは厄介になるから、だつてさ。それに雄英の信用を地に墮とせる」

「さあ、リベンジといこうか」

雄英を再び悪意が襲う。

「ヴィラン連合開闢行動隊、いくぞ」

その日は続かない。この作戦がボクの最後の墓場になるなんて、この時は思いもしなかった。

雄英の林間合宿2日目。先日のヴィラン連合、USJ襲撃事件を踏まえて、当日に行き場を知らされた俺たち。相澤先生、ブラドキング、プッシーキャッツの4人組の少数で内密に行くこの合宿。ヴィランに悟らせないために企画したそれが、前提から崩された。

「なんでここにヴィランがいんだよおお!?!」

ありえない事実が膝が震える。森は青い炎で火事になり、狼煙を上げる。ヴィランが

俺たちを見て笑った。

半分野郎とレクリエーションの肝試しのペアになった。お互い無言のまま歩く。道の先で、切断された手を見つけるまでは。

「おい……俺たちの前のペア……誰だ！」

「常闇と障子だ……」

暗がりから拘束具をつけた男が現れる。

「肉……肉見せて……ピンクの肉！」

その瞬間、歯が伸びて、こちらへ迫る。咄嗟に氷壁を張り、熱で体を温める。

「爆豪!!ここは俺に任せろ!!他が心配だ!お前の速さなら遊撃も出来る!!」

「半分野郎……!!任せた」

俺は、OFAで体を強化して爆破で空に舞い上がる。そして見つける。

遠くに見える高台に居るクソガキ、洗太とかいう奴に襲いかかる大柄のヴィランを。

爆破で一瞬で距離を詰めクソガキの前に躍り出る。

「テメエをまずぶつ倒す！」

「いきなり現れて、何かと思ったら、ビンゴだぜ」

奴の筋肉が膨れ上がり、肥大化する。

「とりあえず…血イみせろや!!!」

体の出力を50%に引き上げる。今はこれが上限だ。

「はっ！やってみろよおお!!」

こちらを押しつぶさんと接近するヴィラン。だが、ジジイのスピードよりは全然遅い。足の蹴りと爆破で背後へ回り込む。

「なっ?!消えただと?!」

その隙を見逃さねえ!!

「先手必勝!!ハウザーインパクト!!!」

奴を特大の火力で爆破し岩壁に叩きつける。砂煙が晴れ気絶していることを確認する。

「っ、つええ…」

「おいガキ!宿舎へ戻んぞ」

へたり込むガキをおぶり、爆破で空を飛びながら宿舎へ戻る。

着くと同時に、相澤先生が宿舎から出てくる。

「爆豪!!状況は!？」

「先生、クソガキをお願いします。ヴィランは複数居る……!」

「待て爆豪…マンダレイに伝える。戦闘を許可するってな」

「この場の責任を背負うつもりかよ。相澤先生

「わかった」

空へ飛び上がる。広場へ着地しながら、トカゲみたいな奴を爆破でぶつ飛ばす。

「爆豪くん!」

「マンダレイ…戦闘を許可するって先生が言ってた」

「すかさず、テレパスで生徒たちの戦闘を解禁する。」

「ちよつとあんた!いきなりしゃしゃり出てきて」

近づいてくる。オカマを腕の一振りの爆破で攻撃する。こいつらがヴィラン連合なら、あいつがどっかに居るはずだ。どこだ!!

その時、俺の耳を風切音が捉えた。全力で横に飛ぶ。俺がいた場所を黒い光線が貫いた。

「コンプレス!2人を連れて回収地点へ行け!!想像以上にこいつ…つよい!!」

「マンダレイ!!全員をこっから避難させろ!!!」

2人を玉に閉じ込め離脱するマジシャン野郎。逃すか!!

「君の相手はボクだ」

目の前に一瞬で躍り出る緑髪の男。腕を振るわれるが爆破で回避する。風圧で地面が割れ、木が飛ばされるがすれ違い様に、爆破をかける。しかし体が頑強なのか、効き目が薄い！

「ボクのスピードについてくるのか……！」

「漸く会えたなクソデク……！」

「今にテメエをぶつとばして目え覚まさせてやる……！」

あの日の誓いを果たす時が来た。全身に力を込め構える。

「ボクのことを知っているのか？ 君は」

あいつの口から出た言葉に、耳を疑った。その態度は、まるで初めて会ったみたいと言いだった。ふざけんな。なんだそれは……？ 眼中に無いつてのか……！？

「は……何言つてやがる……？」

「忘れたとは言わせねえぞ！ クソナードオオオ!!」

OFAで強化された体と、爆破を掛け合わせる。橙色のスパークが立ち上り、目の前の敵を見据える。こいつに小細工は通用しねえ!! 畳み掛ける!!

「忘れる？ 何を。君なんてボクは知らない!!」

あいつの体から、闇色のスパークが出る。まるで俺とは対照的な漆黒のオーラが、威圧感とともに俺を襲う。だが、保須市で感じたヒーロー殺しほどじゃねえ!!

互いの右拳がぶつかり合う! それだけで俺たちを中心にクレーターを作り、周りの木が吹き飛ぶ。

均衡はまたしても一瞬。あいつの尋常ならざるパワーが俺の爆破とOFAを上回った。

押し返される。全ての衝撃を殺すため、左手で爆破で離脱する。

吹き飛ぶ体を空中で制動し、掛け合わせた爆破で一瞬のうちに背後をとり、蹴りを叩きつける!! しかし、直前に現れたシルドのようなものを凹ませるだけに至り、振り向いたその手から極大なレーザーが射出される。

「ブラックレーザー!!」

ゼロ距離から撃たれると詰む!! 背中を駆け上る悪寒に身を震わせ、受け身無視の回避を選択する。

「今度はこっちからいくぞ! ダークネス・カウル!! オーバーパワー!!」

まるで、ジジイ以上の超スピード。オールマイトよりもパワーだけなら上なんじゃないかと思うぐらい絶望的な速さで、パンチを腹に捻じ込まれる。当たる瞬間に爆破で後

ろに跳躍し、衝撃を受け流すも、圧倒的なパワーは俺の膝を折らせた。

「ゴハアツ!!!」

口から大量の血が出る。受け流してこれかよ…!!

「反射神経は良いけどボクには敵わない」

こちらを見下ろす目。

「生徒にしてはよくやった。だけど相手が悪かったね。ボクの方が強い」

あの時と同じような言葉。だがそこに、俺への恨みが籠っていた目は今はなく。やけに落ち着いて俯瞰するあいつの目は理解不能だった。

「俺のことを忘れちゃったのか…?クソデク」

問い掛ける。

「しつこいね?君なんて知らないって言っただろ。なんなんだ君は」

ああ、そうかよ。本当にムカつく野郎だよお前は。俺がどんな思いで来ようが、まるで相手にしないお前に。頭がフツフツと煮え繰り返る。

「俺を…!あんだだけ恨んでたくせによおお!!!」

気合いで立ち上がり突っ込む。俺の右腕の最大火力の爆破を叩き込む。しかし、爆破を掻き消され、手ごと捕まれた俺は宙に浮く。

「何を言い出すかと思えば、まだそんな訳の分からないことを……!」

目が合う。不可解そうな顔をするデクにもう一度繰り返す!

「思い出せよ!!! 緑谷出久!!!」

「かつちゃ……ん……?」

俺の耳は確かにその声を聞いた。しかし。

「違う……! そんなはずはない!! そんなことありえない! ありえてたまるか!!!」

頭を抱えながら錯乱するデク。振り解かれ、投げ飛ばされる。

「ガハツ!!」

衝撃をモロに受ける。倒れてる場合じゃねえ。追撃は!? 顔を上げ前方を見る。

「知らない！知らない！！知らないっ！！お前なんて！！お前なんてえええええ！！」
頭を振りかぶり、必死な形相で否定される。

「いい加減、認めろや！クソデクウウウウウ！！！！」

「だまれえええええ！！！！」

こちらへ鬼気迫る表情で猛スピードで接近してくる。体を気にして勝てる相手じゃない。俺は80%まで出力を上げて、迎え撃った。

しかし、この出力で、やっと躲すのが成功するぐらいにあいつは速くて、強かった。右のストレートを躲したと思ったら左で撃ち抜かれようとしている。爆破でなんとか回避したと思ったら背後に回られ、回し蹴り。回避に全力を費やす！！逃げることしかできない俺に、あいつは痺れを切らす。

「避けてんじやねえええ！！」

変わらず、突撃してくるあいつの顔に爆破を撃つ！！理性が切れて攻撃が短調になっ
ている！！

「ぐうっ?!?!この、くそがあああ
!!?!?!?!」

それはあいつの初めて見る姿だった。明らかに頭に血が登っている。

あいつはキレると俺みてえな言葉遣いをすることを初めて知った。今までただの一度だつて見れなかったこいつの激情。俺に恨みはねえんじゃないのか？何がそこまでお前を突き動かす。

「はあつ…はあつ…随分と必死じゃねえかよ、クソナードがよお…」

限界を超えた出力の酷使。俺の足は壊れかけていた。

「頭が割れる…!!考える度に!!!お前がいるから…!!」

「お前のせいだあああ!!!」

とてつもないエネルギーを右腕に込めている。この一撃で決めるつもりだ…!!!

「カオス…!!!」

「ハウザー…」

「スマアアアアアアアハシユ」

「インパクトオオオオ」

!!!!!!

!!!!!!

OFFAの出力を最大まで上げて爆破も最大まで高める。錐揉み回転しながら相手に

特大火力の一撃を叩き込む俺の超必殺技と、あいつの全力の右拳がぶつかり合った。

気がつくと俺は倒れていた。足も手も動かねえ。目を向けてみれば、どちらもOFAの反動で紫色にまで変色していた。はっ、そりやあ動かねえわけだ。

こちらに近づく足音。視界に映るのは、右腕を腫らしたらりと下げながらこちらに近づくクソ野郎の姿だった。

「はあっ……はあっ!!おしまいだ」

手が届く距離にまで来た、あいつの左手が振り上げられる。ああおしまいだな。おしまいにしようぜ？

お互いにな。

「ダイナ・マイトオオオオオオオオオオ
!!!!!!」

俺とデクを巨大な爆発が呑み込んだ。

喪失

「思い出せ!!!緑谷出久!!!」

爆豪勝己!のその言葉聞いた瞬間。頭にヒビが入る。緑谷…出久?違う!!ボクは緑谷デクだ!!何を言っている!!

勝手に超思考が発動する。今この状態の理由を突きつけられる。個性の反動。感情を薪にしてエネルギーを生み出す個性?脳のメモリを増やす個性?ボクが怨みだと言われた個性は、ボクの全ての感情を燃やしていて、薪が無くなれば廃人になるような代物で、超思考と言われた個性は実は副産物で、脳のメモリを増やす代わりに記憶を捧げる個性だった。そこまでわかってから先生の目的も弾き出す。そのあまりにも残酷な結論に辿り着いた時、個性が制御できなくなつた。

足の前からすうっと力が抜けて冷たくなる。知らないかと否定する度にガラスが一枚一枚割れていく。その度に何かをどんどんと忘れていく。ボクがボクたらしめる理由が抜け落ちる。

次第に遠くなっていく思考。だというのに頭痛がどんどん激しくなる。ああ、ボクは今、何をしているんだっけ…？

時間の感覚がない。こちらへ錐揉み回転しながら爆破を撃ってくる誰か。体が勝手に動いて、迎え撃った。

そして止めを刺そうと思った時、相手の体が光り輝いて爆発した。

命の輝きがボクを包み込んだ。でも、不思議と痛みは感じなかった。懐かしい、光り…！

そうだ…君は…!!!

「かつちゃん…！ごめん…!!ボクが…：僕が!!不甲斐ないばかりに!!!」

光が晴れ、目を開ける。折り重なるように倒れている僕たち。痛む体を起こして、いつからだったかは忘れてしまったけれど、とても大切な幼馴染の顔を見る。

死んでいた。最後の爆破で力尽きその目は硬く閉じられていて、息なんてしちやあい

なかった。

「おい、かつちゃん…死なないでよ…！僕を…！！僕を助けて勝手に死ぬなよ…！！」
ノイズが走る。殆どのことを忘れてしまったけれど、かつちゃんという幼馴染みがい
たことは覚えている。

「こんなの、認められるか…！！認め……られるかあああああ
！！！！」

「助ける！！今度は僕が…！！君を助けるよ！！」

かつちゃんの胸に手を当てる。絶対助けるんだ！

感情が溢れて、体から力が吹き荒れる。キラキラとした青い幻想的な輝きが僕たちを
包み込んだ。

それが全てかつちゃんへと流れていく。

「助ける…！助ける！助ける！！助けなきやいけないんだあああ
！！！！」

たとえ、記憶も感情も失おうとも絶対に君を助けるよ。

僕の想いを目の前の誰かに注ぎ込む。何故かは分からないけれど、さつきまでそうし

ていたから。霞む頭を振りかぶり、さらに注いでいく。そうして、何も考えられなくなつて…

「僕はなにをしていたんだっけ」

「僕は…誰なんだ？」

空白。頭にはもうノイズすら走っていないかった。

「まだ自我が残っているのか」

何かに話しかけられる。

「だけど、この程度の残りカスなら無いも同然だ」

「ありがとう、■■■■。君は僕のヒーローだ」

頭の中を何かが入ってくる。やめて！入ってこないで！！嫌だ！嫌だあああああ
!!!!!!

「目が見える。足が動く。苦しくない」

「筋骨バネ化。瞬発力×10。臂力増強×12。さらに増殖。肥大化、槍骨。鋏。」

「素晴らしい体だ…!!これだけ掛けてもまだ余裕がある…!!」

全身を覆うまるでセンスのないグチャグチャとした個性の集合体。

「もう、警戒する必要すらない。運がいいねOFA継承者、生かしてあげるよ」

「どうせ、僕には敵わない…!!」

最悪の怪物が誕生した。緑色の破壊者が。

俺にとって緑谷出久という存在を一言で言い表すなら弟だった。俺と一緒に社会を

壊すと約束した。俺を気にかけるお節介な奴。ヴィランのくせしてヒーローみたいだから、パシらせてみたら行つてしまつて、少し後悔した。目標に努力して冷静に判断しながら次のステップへ進む。俺が最も信頼する男。

「おい、どういふことだよ？先生」

「様子見に来たら、いきなりこれだ。説明しろよ。今、俺はかつてないほどムシヤクシヤしてんだ…!!」

いきなり3人もやられ、危険だと判断した。駒を失うわけにはいかないと思つた俺は回収地点に赴き、ことのあらましを聞いた。聞けば生徒に瞬殺されたそうじゃないか。野放しにできなかつたから、至急全員撤退させた。捕まつちまつた奴までは回収出来なかつたから、俺の怒りは抑えきれなくなつていた。そんな時だつたのに。

目の前には、緑谷出久の体を動かしている、何かがいた。

「吊か。ククツ僕は今完全無欠となつた！もう後継を育てるのは止めだ」

「そして彼は、私の素敵な木偶人形だつたつてわけだ！」

あいつの顔で話すな。その鬱陶しい面をぶん殴りたくなる。

「返せよ…」

「返さない」

「俺の仲間を返せよ…!! 寄生虫!!!」

あたりを全て崩壊させる。あいつの顔をした、寄生虫が空中に浮き、逃れる。

「おっと、空にいれば君は無力だ。そのまま指を加えて見ているがいい!! 新しい時代をね!!」

それだけ言い残して、消え去る。

「ふざけるなあああああ!!!」

怒りが爆発した。壊す!!! あいつをぶっ壊す!!!

雄英高校をまた、ヴィラン連合が襲撃した。そのニュースは瞬く間に全国的に報道されている。

奇跡的に撃退することができ、主だった被害は軽度のガスによる生徒の気絶と一名の意識不明者のみ。目立った外傷は無くこちらにも気絶しただけという診断が出た。

攻め入られたことは恥ずべき失態だけれど、被害が出ていないんじゃないやつつきようも無

い。

そんなニュースが霞むほどに、その後起こったことは、世界を揺るがした。たつた一人のヴィランが一日で、都市を壊滅させた。

黒煙が上がり、街が火の海に包まれる。建物が全て倒されたその風景はこの世の地獄と言つてもおかしくなかった。

「ふふふ……ふはははははは!!素晴らしい!!何もかも思い通りだ!」

スーツを着た緑髪の少年が中心に居た。この場所に似つかわしく無い貌に、その身から溢れる異常な悪意は一目でこの惨劇を起こした張本人だと看破出来た。

そこに一人のヒーローが現れる。

「オールフオーワン!!!返してもらどうぞ!少年を!!!」

彼の名はオールライト。金髪の髪。極限まで鍛え上げられてはちきれんばかりの筋肉。全てを救う青い目。その顔は憤怒に染まっていた。

「返す?おかしなことを言う。これは僕の体だ」

悪びれることもなく、両手を広げ醜態に笑う。

「そもそも、君は彼の手を振り払ったじゃないか。だから僕が貰った。今更ヒーロー面しようと君は遅すぎた。だからこうなる」

彼の手から空気が押し出され、台風が巻き起こる。瓦礫を呑み込みながらオールライトに襲いかかる。

「デトロイト…スマアアツシュ!!」

拳から繰り出される極大の風圧。両者が衝突し、周囲を更地に変える。しかし、オールライトの風圧を掻き消し、その体を無数の瓦礫が襲う。

「中々のパワーじゃないか。無理をしているのに、よく出せる」

コスチュームが血に染まる。膝をついたオールライトの口から血が漏れる。

「しかし、無意味なことをする。君が彼を助ける?戦闘力しか取り柄のない君がどう

やっつて彼を僕から解放する?」

「まさか、殴ればなんとかなる…でも思っているのか?そこまで脳筋だったのかな?」
相手をただひたすら嘲る声。

「ツ…!!…それは…」

歯噛みし拳を握り、地面に叩きつけるオールマイト。自分じゃもう彼を助けられない…その現実を突き付けられる。

「自分の犯した間違いを悔いながら死ぬ。オールマイト!!」

走り出すオールフオーワン。救えなかったヒーローを踏み潰すために。

オールマイトは立ち上がり構える。たとえ無意味だとしても、折れるわけにはいかな
いと奮起しながら眼前を見据える。

「なに?」

不意にオールフオーワンの足が纏れる。地面に膝をついた。

「残りカスが…!!無駄な抵抗をするな!!!」

心を呑み込んだはずの存在が抵抗する。

「オールマイト!!オールマイトオオオオオオ!!!」
突然頭を抑え始める。悶絶し、地面を転げ回る。体を苦痛から逃すよに。

そして、意識が切り替わる。

「オール…マイト…!」

少年の体から青い輝きが空へと昇り天を貫く。黒く染まった雲を吹き飛ばし、太陽が顔を出す。

「少…年…!…なのか…!?!」

問い掛けるオールマイト。

「貴方が…大好き…でした…!」

手を伸ばす少年。それに応えようとして。オールマイトは手を伸ばそうとして……

「勝手なことをされては困る」

その手をまた振り払った。意識が切り替わる。

「全く…残りカスの分際で生意気な。だけど、残念だけど最後の手も届かなかったね。オールマイト」

「いいや…届いたさ…!!」

顔に笑みを浮かべるオールマイト。そして、全身に力を込める。振動で地面が震え、力強く、気高い青いオーラが立ち上り風が舞う。

「少年の想いは最後に私に届いた!!!」

かつてないほどのパワーに空気すら青く発火する。

「貴様の敗因は、ただ一つ!!!少年の心を見誤った!!!」

「調子に乗るな!!死に損ない!!!」

体を歪に隆起させる。肥大した筋肉に纏わり付く大量の個性。

「ユナイテッドオオオオオオ!!ステイツオブ!!!」

「臂力増強×100!!!オオオオオオオオオ!!!」

!!!!!!

その空気を壊すかのように、オールマイトの頭を小突く手。振り返ったオールマイトは驚愕に目を開かせる。

「君は…!!死柄木吊!!」

「うるさい…!!黙っている。集中出来ない」

言うなり、出久の頭を五指で掴む。しかし、崩壊は訪れない。

「何をして…!?!」

警戒するオールマイト。

「俺の崩壊でこいつの頭の中に居る寄生虫を粉々にする」

「そんなことが…出来るのか!?!」

驚愕のカミングアウトにさらに目をひん剥く。

「出来なきややらねえよ」

そして、手を離して立ち上がり、踵を返す。

「今日はムカつくお前を殺すのは我慢してやる。社会のゴミ」

ワープゲートの中に消える死柄木。

「緑谷出久を救って頂いたことに、感謝を。しかし、次会う時は敵同士ですので悪しからず」

黒い靄の主、黒霧もそう言葉を残し、消える。

戦いは終わった。しかしまた、次の戦いがやってくる。1人の少年を降ろして。

エピローグ

柔らかな陽光が窓から降り注ぐ。風がカーテンをヒラヒラと舞わせて白い病室に穏やかな空気が立ち込める。

記憶も無くして、名前も忘れた僕は、毎日を病室で退屈に過ごしていた。時々様子を見に来てくれる、僕の知り合いだと言う人たちとお話するのが唯一の楽しみだった。

「H A H A H A!! そうか! ヒーローが好きなのか! 少年!!」

僕に会いにきてくれるヒーロー、オールマイト。もう引退しちゃったけれど、なんでも元No. 1の凄いヒーローで、テレビでも引つ張りだこなんだ。そんな彼が、僕の知り合いだという。テレビの向こうの存在が僕と知り合いつてどうということなんだろう。

「うん! 僕はかっこいいヒーローが好き!!」

オールマイトの常に笑顔を浮かべて、人助けをするそのかっこいい姿に僕は焦がれた。

「僕も…僕も! 退院したらオールマイトみたいなヒーローになれる…かなあ?」

僕の体はよく動かなくて、病弱だ。個性も、まるで全部が粉々にされたようになっていて、実質無個性らしい。何かの後遺症らしいけれど、詳しくは聞かされなかった。け

れど、憧れた存在に認めてほしくて、僕はダメ元で聞く。

「もちろん!!君はヒーローになれる!!」

即答される。

オールマイトは更に笑顔になり僕に答えてくれる。

「だから、入院生活も頑張るんだぞ!少年!!」

大きな手が、僕の頭を撫でる。優しく暖かい大きな手が僕の心を満たす。

「実を言うとね、引退しちゃったけれど君と話すようになってから体の調子がすこぶる良くてね!もしかして、君のおかげかも!!」

「本当!?!なら僕、オールマイトのヒーローだね!」

「ああ!!」

「オールマイト、来てたんすか」

暖かい雰囲気の一部屋に、乱入者が現れる。

「おお！爆豪少年!!」

爆豪っていう人なんだけれど、彼も僕の知り合いらしい。あだ名はかつちゃん。正直ちよつと苦手だ。顔が怖くて、口も悪い。そんな彼もヒーローでこの間発表された前期ヒーロービルボードチャートに、超若手実力派。怒涛の勢いで駆け上がり、8位を記録したようだ。世間ではまるでオールマイトの再来だなんて言われている。

「出久。テメエ、ヒーローになりてえのか」

鋭い目がこちらを睨む。怒ってるのかな…

「退院したら俺が鍛え倒してやるよ」

それだけ言って、病室から出て行く。な、何だったんだ今のは。

「爆豪少年も協力してくれるってさ！少年！」

あの凶悪な人が、僕を鍛える!?死んじゃうよ!?

「鍛え倒されるの、僕!？」

「H A H A H A!!彼なりの激励ってわけさ！」

いやいやいやいや！普通そう捉えないよ！

この後しばらく話した後、オールマイトに仕事が入っちゃって病室の中は僕一人だけになる。

でも、すぐに茶髪の女の子が来てくれた。彼女は麗日お茶子さんって言うらしい。「出久くん！お見舞いに来たよ！」

なんと彼女もヒーローなんだって！今はまだ目立った活躍はないけれど、街の人から凄く好かれるぐらい素敵なヒーローらしい。

彼女の目は、病室の机に飾ってある一輪の赤い花：ラナンキュラスに向けられる。

「あれ？この花、誰が持ってきたか分かる？出久くん？」

気付いたらいつの間にか飾ってあった花瓶。

「え？ううん…。いつの間にか飾ってあったんだ。誰だろう？」

「ふふ…知ってる？出久くん。ラナンキュラスの花言葉って」

「あなたは魅力に満ちている、って言うんやで」

優しいな目で語りかけてくれる。麗日さん。なんとなく、少し。ほんの少し胸が痛んだ。

病院生活だけど、暖かくて穏やかな毎日。僕は、ヒーローになるという夢を持って、歩き出す。

「おいおい！会って話さなくていいのか!? よくない!!」

マスクを頭から被った1人の男が問い掛ける。超常解放戦線が1人の少年の手によって解体され、彼らもまた野良のヴィランに戻る。

「いいんです、仁くん。デクくんはやつと自分に正直に生きられるんですから」

赤い花を一輪、胸に抱えながら想いを吐き出す。

「そこにヴィランのわたしは必要ないんです…」

チョーカーを首に巻くその女は目から涙を零す。

「最高戦力、罪作りすぎだろ!!」

男も涙を流す。たった一回の作戦しか協力していなかったが、彼の人柄、想いにこの男も胸を打たれていたのだろう。

「バイバイ…デクくん…」

彼らは闇に紛れる。それはもう決して交わらない。交わってはいけないものとなった。

「おい出久!!はよ事務所行くだ!!」

1人の男がこちらへ睨みを飛ばす。その顔は凶悪なまでに歪められている。

「ま、待ってよ!かつちゃん!今行くから!」

大急ぎで靴を履き、玄関のドアノブに手をかける。

「出久う!!」

しかし、急いでいるのに呼び止められる。

「なに!?!お母さん!!」

振り向く。その顔は心配そうにこっちを見つめていて…でも、とても優しくして…

「超かっこいいよ…!!」

涙を流しながら僕を見つめるお母さん。

僕は最大限、お母さんを安心させられるような笑顔を向けて。

「行つてきます!!」

雲一つない空の下、僕は走り出した。憧れだったヒーローにようやく成れて、隣には親友がいて共にヒーロー活動が出来る。僕は彼のサイドキックとして、これから待ち受ける日々に笑みを浮かべた。

遠くで爆発音を聞くまでは。

「っ!? かつちゃんは先行つてて!!」

「おい!? 出久! 待てよ!!」

サポートアイテムの補助で、電柱に飛び乗り、そのまま、屋根伝いに現場へ急行する。「つたく、すぐ周り無視して飛び出しちまう」

ぼやきながら後を追う。

今日もヒーローから逃げます。毎日を逃走に費やし、自分がしたいことをします。わたしは俗に言うヴィランってやつです。

「おい、ねーちゃん？聞こえなかつたか？俺の手下になれよ」

そんなある日、薄暗い路地裏で後ろから突然奇襲をかけられて押し倒されてしまいました。いつもならこんなミスはしないのですが、その日はどうにも胸騒ぎがして。

「ヤです。あなたなんかの手下には死んでもなりません」

抜け出す算段を練ります。しかし。

「おっと！俺の個性は、触れたものの動きを停止させる。触れてる間ねーちゃんは俺のお人形さんさあ…!!」

下卑た目でわたしの体を舐めるように見られる。手慣れていて、普段からそういう事をしていたんでしょう。ピクリとも体を動かさなくなりました。

「じゃあ…いただきまあ〜すー」

男の顔が近づいてきます。ヤです…!!わたしは、彼以外とはそういう行為したくないです!!

「っ！」

ぎゅつと目を瞑ったその時。

「離れろおおおおお!!!」

とても懐かしい声を確かに聞いたのです。

「スマアアアアアアッシュ!!!」

彼の手からパンチが繰り出されます。おそらくサポートアイテムの補助ですが…かなりの威力を持っていました。

男は壁に吹っ飛ばされて意識を飛ばします。

たったの一撃でヴィランを退けた彼がわたしに近づき笑顔で言い放ちました。

「もう大丈夫だよ。なぜって?」

「ボクが来た!!!」

涙が溢れてきちゃいます。おかしいなあ…!!もう整理した想いのはずなのに、記憶を無くした彼はわたしと会っっちゃいけないってずっとわたし思ったのに!!

胸を焦がす炎が、全然消えてくれません…!!

「デク…くん…!!」

その愛しい彼の名前を呼びます。呼んじやいました。駄目なのに…!彼はヒーロー
でわたしはヴィラン…!!

「やっと思つけたよ…トガちゃん」

彼の口から出た言葉に、わたしは聞き間違いを疑いました。

「…え?」

でも、顔を見上げると、よく知ったあの時と変わらない笑顔でわたしを見つめます。

「なんで…?どうして…!記憶は無くなったはずです!ありえないのです!」

そう、ありえない。記憶を無くしてしまったはずなのです。わたしのこと覚えてい
ちやいけないのです!

「忘れないよ」

彼はわたしの首にあるチョーカーを優しい手つきで撫でます。その行為が堪らなく

胸を締め付けます。

「たとえどれだけ、失って擦り切れても」

「君だけは忘れない」

そんなこと、言われちゃったら、駄目なのです。わたしは彼に抱きつきます。でも、代わりに口からは非難の声が出ます。

「だめっ…じゃないですかあつ…。せつかくヒーローになったのに…。あんなに頑張ったのに…!!」

「自分に正直に生きたの…!!わたしのことを覚えてちや…意味ないです…!!」

嬉しいのに、それが堪らなく辛いです…!!

「トガちゃん。ボクは自分に正直に生きてるよ。今この瞬間も」

「目の前の泣いてる女の子一人救えないで何がヒーローだ!…ってね」

ウィンクをする彼。わたし最初からただの女の子じゃないです…! ヴィランです…

!!

「わたし…ヴィランです…!!それでも!」

「それでも君を救う」

凍えていた体が熱を持ちます。顔が真っ赤になって、胸がドキドキして頭が働かなくなります。

「デクくん……！」

「やっぱりわたしあなたが好き……大好き!!わたしのものにしたいです!!」

呪いの言葉を彼に囁きます。もう、戻れないです!今までの生活に、戻させない!

「ボクも……!!」

「君をボクだけのものにしたい……!!」

手を握り合い、唇が重なり合います。ずっと求めていた。彼の全て……!
「えへへっ……!ヒーローなのに欲張りさんなのです……」

胸の中が、凄くあつたかくなりましただ……!もう永遠に……離さない!!

「続いているニュースです。人気急上昇中のヒーロー、デクが行方不明になりました。現場には、彼の衣服の一部が残されており…警察は誘拐を疑っております…」

「あの野郎…!! 目離せばまたどつか誘拐されやがる…クソがああああ!!!」

男の怒りが怒髪天に達した。

「えへへ…残念ですが彼はわたしの隣で寝ているのです…!!」

「そ、そういうこと言わなくていいから…!」

頬を染めた彼が恥ずかしくあります…ああ…カアイイです…!!

)
F
i
n
)

番外編

愛の逃走★挿絵あり

白い砂浜が見渡す限り一面に続いており、透き通ったエメラルドグリーンの海から聞こえる小波は、まるで僕たち2人を静かに、そして優しく祝福していた。

しかし、太陽の光がその身を焦がすかのように情熱的に僕たちに降り注ぐ。この身を焦がす恋の炎のように。

「デクくん……やっぱりわたし……もう我慢できないよ……！」

「ト、トガちゃん……こ、こういうのは順序を踏んでからの方が……」

耳元で、どこまでも甘い声が囁かれる。声を聞くだけで胸が高鳴り、顔が真っ赤になる。

「えへへ……デクくんも、したいよねえ……!!」

まるで発情期の猫のような嬌声を発し、発情した顔の悪魔が僕を拐かす。彼女を視界に入れるだけで頭が働かなくなり、正常な思考が出来なくなる。

「デクくんの口からも言っってほしいなあ……」

ニヤニヤとこちらを見上げ、要求を突きつけられる。彼女のこれは要求ではなく、強制と言った方が正しいか……!

「ぼ、僕の口から……そんなこと……!」

期待に目を輝かせるトガちゃん。やめて下さい。僕はその目に弱い。

「そ、その……海で……!」

声の上擦る。胸が張り裂けそうだ。

「うんうん。海で、海で?」

続きを促すお姫様。彼女は両手を握りしめもう一声、もう一声と、身を乗り出し、僕に催促する。

「海で……!!!」

その言葉を口に出す。自分の想いを全てぶつけるように。

「海で!!!泳ぎたい!!!」

「いえーい!!!行きましよう!!!今すぐ!!!なうです!!!」

ここまで静かで綺麗な絶好のデートスポットでやること!!それは海で泳ぐ!!メタイことを言えば、この小説はRー15だ!!間違いは起こらない!!

走り出すトガちゃん。彼女は赤いビキニを着ており、その白くて穢れの無い艶かしい肢体を太陽の元に惜しげもなく晒していた。いつもシニヨンにして結っている髪は下されており、綺麗な金色の艶髪はさらさらと柔らかく風に靡いている。

「待つて!トガちゃん!!」

彼女の細くて綺麗な手首を掴み、引き留める。

「ぶー!なんですかー!!」

動きを止められて、ふくれっ面を見せるトガちゃん。その顔も可愛いよ。

「海に入る前に準備体操をしようね?」

「むー…わかりました。…準備体操やります」

不承不承に頷く。ごめんね、でも大事なことなんだ。

「トガちゃんが怪我しちゃったら僕、悲しいな。それにほら、ずっと笑顔を見ていたいかな」

「デクくん…!心配してくれたんだ!嬉しい!!」

ガバっと、抱きつかれる。僕の腰に足を絡ませて密着される。巷で言うだいたいゆきホールドをなんとか踏ん張って受け止める。

「お、おもっ……！」

全体重を乗せられて、つい口を滑らせてしまう。し、しまった！

「そういうこと女の子に言うの、ダメだよねえ……」

さつきまでの甘い雰囲気や嘘のように消え、彼女の目が恐ろしい程に鋭くなり、僕を睨みつける。そんな顔も可愛いのがトガちゃんの不ぞろいところだけど、これは本格的にまずい！

「あつ、あはは……！かつ、軽いよ！もう羽みたい！ほらー！」

その場で彼女を抱えてクルクルと回り必死に軽さアピールをする。この状態で機嫌を更に損ねればナイフが一切容赦なく殺意増し増しで飛んでくるので、最大限に注意しなければならぬ。僕が彼女としばらく過ごしてなんとか得た経験だ。

「んふふっ！仕方ないですね、そういうことにしてあげちゃいますー！」

なんとか、首の皮は繋がったようだ。不用意な発言は死を招く。心の中で溜息が漏れる。次は気を付けねば！つと心の中で誓う。

彼女は僕から降りて白い砂浜に小さな足跡を付けていく。そして、そのまま、小走りで水の中に入り、膝辺りまでを浸からせる。

「ほら、デクくんも！はやく！！」

呼びかけに応える。しかし、何かを忘れているような…あつ！

「あー！準備体操してないじゃないか!!こらー!!」

彼女を連れ戻しに駆け足で近づくと、

「わー！デクくんが怒った!」

彼女は水に手を浸し、腰を屈めて、手をこちらに振るう。僕の顔面に飛びかかる水。反応が出来ずにモロに目に入り、海水の浸透圧が目を襲う。海の水って目に染みるよね。

「わぶっ!」

締めまらない声をあげてしまう。やったな!!

「あはー！わぶってー！わぶって!!」

ツボに入ったのかお腹を抱えながら、肩を上下させて可愛らしい笑顔で笑われる。ちよつと怒っていた感情が消え失せ、僕も釣られて笑ってしまう。

「仕返しだあ!」

同じように水をかける。顔は狙わない。多分顔にかけたら、酷いことになると思うので。

「きやあ!えへへ…!えーいつ!」

可愛らしい声を出すトガちゃん。僕たちは水を掛けあう。今を全力で楽しみ幸せそうに微笑むトガちゃんに僕の心も満たされてゆく。来てよかった…と。

そんな幸せは長く続かない。ボン、ボンという何かが爆破される音が次第に近づいてくる。あれは…!!

「クソ出久ううううう!! やつと見つけたぞゴラア!!!」

僕たちの幸せを邪魔する存在。そう、あれは…かつちゃん!!

「まずい…! かつちゃんが来た!! トガちゃん! 逃げよう!!」

トガちゃんの手を握り、走り出す。

「きゃー! 見つかつちやいました!!」

まるでこの状況も楽しむように、彼女は笑顔だ。す、すごいな…! あの凶暴な顔は間違はなく過去1でキれているのに。

「逃げんな! 出久!!! イカれ女も出久を誑かしてんじゃねえ!!!」

追いつがる彼の顔はもう、怖すぎて見れない。

「誑かすなんて!! 出久くんが先にわたしを救ってくれたのです!!」

そ、そうだね! たしかにそうだけど! 今暴露されるとちよつと恥ずかしいかな…!

「ご、ごめん！ かつちゃん!! そういうことだから!!」

「待てやあああ!!」

水の掛けあいをしていたら、いつの間にか鬼ごっこになっていました。僕たちは、彼に見つからないように森の中へ入り、その先にある薄暗い洞窟に隠れて、振り切る。

「はあ、はあ、見つかるのはや…! 流石かつちゃん」

執念で、探してくる幼馴染みに舌を巻きながら、息を整える。

「えへへ… 楽しかったです! ここも、また離れないとです」

目まぐるしく各地へ移動し、疲れているはずなのに彼女は笑顔を崩さない。

「トガちゃんも逃げるの、疲れていないの?」

だから、聞いてしまう。我慢しているなら、言っただけでほしくて。

「わたしは闇に潜むヴィランですから、逃げるのには慣れてます」

「それに、いつも一人で逃げてましたが、今は違います」

彼女は過去を思い出し、眼を伏せる。そして、満面の笑みで僕に言い放つ。

「隣にデクくんが居てくれてるだけで、何でも出来ちゃいます!」

胸が高鳴ってばかりだ。いつも彼女はどんな思いで逃げていたんだろうか。もうそんな思いはさせないと誓う。

「トガちゃん…」

「デクくん…!」

愛しい彼女を抱き寄せ、口づけをする。彼女が僕を離さないように、僕も彼女を離さない。

「んうっ…今隠れたばっかなのに…こんなことしてちや見つかっちゃいます…」

「なんだか追われてると、余計にいけない気分になるよね?…スリルを味わいながらこういうことするのって」

「デクくん…変態です…!」

甘い甘い時間がやってくる。見つかるかもしれない。でも、そんな時だからこそスリルを味わいたくなる。ピンチはチャンスだ。

しかし。

「デメエの性癖なんて、どうだっていいよ、なあ？」

入り口に陣取る乱入者。またもや、甘い雰囲気を散らしていく。

「大人しく捕まれや!! てめえら!!!」

爆破で接近! トガちゃんをお姫様抱っこして、かつちゃんを躲す。そのまま入り口を抜け、全速力で逃げる。

「ごめんなさああああああい!!!」

謝りながらも足は止めない。

「デクくん! 速ーい!!!」

「待てやあああああ!!! 逃げんなあああ!!!」

白い砂浜。エメラルドグリーンの海を背景に、僕たちは逃げ続け、かつちゃんはそれを追いかける。

でも、ごめん。捕まるわけにはいかないんだ。だから。

番外編 破綻者

普通の雑居ビルに違法でテナントしている僕たちのアジト。室内は薄暗く、壁のレンガタイルは所々が抜け落ち、寂れた雰囲気醸し出している。しかし、床には塵一つとして見当たらず、ここが丁寧に清掃が行き届いた場所だと伺わせる。僕と弔くと黒霧さんは普段ここで寝泊りしていて、作戦が始まるまでは開闢行動隊の皆には招集をかける時以外は各自で生活してもらうことになっている。そのはずだった。

チリーン、と誰かが入ってくることを知らせる鈴の音が鳴った。こんな時間に誰かを招集する予定はない。僕たちは一斉に警戒しながら侵入者を見やる。

「お腹空きました!!」

お腹を両手で軽く抑え、そう主張する彼女に辺りは沈黙に包まれた。

警戒した雰囲気は霧散し、誰もが彼女を無視した。弔くと僕はチェスの続きを、黒霧さんはグラスを磨く作業に戻る。もはや、この自由奔放な彼女の相手をする者は誰もいなかった。

「無視しないでください!!」

尚も主張する彼女。彼女の名前はトガヒミコ。最近ヴィラン連合に加わった新しい仲間だ。

「おい、トガ。招集はかけてない、来るな」

弔くんがめんどくさそうな声で遇らう。

「あと、たかりにも来るな。ここはそういう店じゃあない」

ここはあくまでもバーなのだ。決してレストランではない。純然たる事実にとがちちゃんは、頬を膨らませる。

「むー…だって、デクくんのお料理美味しかったんだもん!」

この前開いた歓迎会のことか。いや、たしかに彼らはどうやって食いつないでいるのか気になる所ではある。マスタード君はお金払ってそうだなあ、と益体のない事を考える。

「ねえ、デクくん!作ってよ!ご飯!!」

トガちゃんは弔くんと話していても無理だと悟り、僕に直接頼むことにしたようだ。

これに関しては了承が出来ない。無償で与えるだけ与えるのは違うからだ。例えばステイン。彼の知名度が、連合にとって有益なものとなるから、仲間になる前でも脳無を貸し出した。

しかし、現在トガちゃんがこちらに与えられる物はない。開闢行動隊に関しては、林間合宿襲撃時に本当に仲間か判断する…という弔くんの慎重な結論に至ったからだ。歓迎会はあくまでも歓迎会。こちらもおんぶに抱っことはいかないんだ。

そこまで考えて、ある一つの解決策が浮かぶ。これなら弔くんも渋々許してくれるだろう。

ボクはトガちゃんに酷いことを言ってしまった。オールマイトに否定されたことを忘れて、トガちゃんを否定する…という自分がされて一番嫌なことをしてしまった。一応許してもらえたのだが、その影響でボクはトガちゃんを無下には出来なくなっていた。

「あー、ちょうど食材切らしてて、今日買い出しに行こうかなって思ってたんだよね。だから、トガちゃんが手伝ってくれたら作ってやれないこともないと思うよ？」

なんとも情けない提案だ。そもそも、買い出しなんて1人で出来る。自由奔放なトガちゃんは寧ろお荷物になるかもしれない。けれどこれがギリギリのラインだと思う。弔くんが認めるギリギリ。

「ほんと!?行くー!買い出し行こうよー!デクくん!」

心底嬉しそうなトガちゃんに少し胸がときめく。いや、今はそういう感情は極力控える。ボクはヴィランとして闇に潜む者。浮かれていてはすぐに足がつく。

「おい、お前はこいつに甘いんだよ。マスキュラーが頼みに来てたら断つただろ」
弔くんもボクを注意する。それとマスキュラーごめんなさい。あなたは間接的に断られました。

「だめかな？弔くん。最低限のギブアンドテイクは果たしていると思うけれど」
弔くんは与えたら返してくれる男だ。こう言えば納得してくれる…はず。

「はあ、わかったよ。許可する」

渋々。本当に渋々ながら彼は応えてくれた。

弔くんの許可おりました！やったね！トガちゃん！

「良かったね、トガちゃん。いいってき」

ボクは微笑みながらトガちゃんに話が纏ったことを伝える。彼女は既に感極まっていた。

「本当ですか!?!行きましよう!!今すぐ!」

一瞬でボクの間合いに入り腕を掴まれる。はつや…!何今の。ボクが反応すらでき

ないなんて……。見れば申くんたちも哑然としている。この身のこなしのレベルはおかしいよ、ほんと。

「じゃあ、行つてきまゝす！」

なんとも暢気な声でトガちゃんはボクの腕を掴んだままバーを後にするのであった。

「おい、黒霧。あいつのスピードおかしいよ。見えたか？」

「いえ……残像が出来ていたようで……何も」

「俺もだよ。あの緑谷すら反応できていなかった……」

知らない所でトガちゃんの評価は上がっていた。

この前、麗日さんと鉢合ったスーパーとは別の場所。大分離れた所までボクたちは来ていた。

「デクくんは何でお料理してるんですか？好きだからですか？」

「買い物カゴを持ったトガちゃんに聞かれる。連合の皆はしないもんね。」

「これには理由があつて、ボクの訓練スタイルと深く関わってるんだ」

一瞬、聞かせるのを迷う。異常なやり方だし、なんとかして濁そうかなあと考えた。しかし。

「聞かせてほしいです！もしかして、それで血の匂いがすごく濃くて良いのかもかもしれません！」

トガちゃんは血が好きらしい。そうだね。多分聞かせたら更に喜びそうだ。

「えっと、まず、健康で頑丈な体を作って体調のコントロールをするんだ。そして、その体を自分の個性で殴って痛めつける。痛めつけたら個性で治して更に頑丈にするって感じを日に数十回やるんだけど…」

ボクの常軌を逸した訓練方法にトガちゃんは目をキラキラさせて

「素敵です!!だからそんなに美味しそうな香りがするんですね!」

普通なら気味が悪いと思われる訓練方法で、ボクもあまり他言したくはなかった。けれど、トガちゃんはボクを肯定してくれる。ボクの心を溶かしていく。柄にもなく安心感を感じていた。もつと隣に居て欲しいと少しだけ思った。

「ありがとう。そんなこと言われたのは初めてだよ」

笑顔になってしまう。いかん、ボクはヴィランなんだ。もつと気を引き締めないと…

「えへへっ…デクくんの血吸いたいです」

あ、これはまずい。今は人目もあるし、こんな所で流血沙汰を起こすわけにはいかない。

「ストップストップ…今したら買い出しが出来なくて、ご飯も食べられないよ?」

なんとか宥める。自分に正直に生きるあまり、周りを顧みないのは今この状況だとまずいことをトガちゃんに伝える。

「あ…そうでした。買い出しも大事です」

なんとかわかってくれたようだ。こういう話題は避けた方が良いな。お互いのために。

しかし、次の話題がない。ボクが黙ったのを見てトガちゃんは口を開く。

「あ、もう一つ聞いていいですか？」

質問を変えてくれるようだ。女子との会話が苦手なボクには、リードしてもらえないことは非常にありがたい。トガちゃんは破綻しているけれど、空気も読んでくれる優しい子だ。

「うん、いいよ」

彼女は特大の爆弾を投げかけてきた。

「デクくんっておじさん…オールマイトが大好きなんだよねえ？でも、そのオールマイトをめちやくちやにして殺したいって思ってるんだよねえ！」

「わたしも、好きな人に成りたくて好きな人を殺したいです!!それって…」

「それって…わたしとおんなじです!!!」

自分が同種の破綻者だと告げられる。

トガちゃんは好きな人に成りたいがために、好きな人を殺す。

ボクは、オールマイトが大好きだったけれど、否定されたがために、全てが裏返った。憎んだ。殺してボクのことを後悔しながら死んでほしい。道端の石ころで誰にも相手されないような無個性野郎だった奴に復讐されてNo. 1の最大の障害だったと脳に刻みつけながら殺したい。

本当だ。人を破綻者だと言う前に自分が破綻者じゃないか。同じだ。同じじゃないか。笑えてくる。自分のことをいかに知ろうとしなかったか。それを、最近仲間になった少女に突きつけられる。

「ふっ……ふっふ。確かにおんなじだ。笑えてくる」

ボクの様子の変化に目をパチクリさせるトガちゃん。今すぐくお札を言いたいんだ。「ありがとう、トガちゃん。ようやく自分のことが分かった気がする」

胸の中が解放されたような気分だ。今なら何でも出来る気がする。ああいい、いい気

分だ。

「どういたしまして、デクくん」

にっこりと笑うトガちゃん。

「でも、デクくんはヒーローにもなりたいんだよね…」

彼女の呟きはボクには聞こえなかった。

ボクの目の前には、オムライスが作られていた。トガちゃんは血が好きそうだからケチャップも好きなんじゃないかと考えた結果だ。

「はいどうぞ、トガちゃん」

大人しく椅子で待つてくれたトガちゃん。オムライスが乗った皿を机に置く。いや、本当に大変だった。わたしも手伝います！と元気に返事してくれたとこまでは良かったんだ。

黒霧さんのエプロン（ハート柄）を着させていざキッチンに立たせると、壊滅的な手つきでキッチンを汚していった。ナイフを上手く扱えても料理は出来ないのだということがわかりました。しょうがないので、椅子で待つていて貰ったんだ。

「わあああ…美味しそうですー！」

反応が良くて困る。また作りたくなってしまいうから、そういうのって。

「良ければまた作るよ」

だから、つい、こういう言葉が出てしまう。

「本当ですか!?!やった!!」

純真無垢な子どものように万歳するトガちゃん。餌付け??いいえ、これには深いわけがあり…

「おい、勝手に決めるな」

話を聞いていた弔くんが横槍を入れる。まあ、当然だよな。でも、あれを見たからには納得してもらおうしかない。

「弔くん…あの速さは惜しいよね？」

ボクを一瞬でバーの外へ出した一連の動き。その初動。誰も反応出来なかったそれを、ボクは引き合いに出す。

「ちっ、これだからリア充は爆発すればいいんだ」

これを言えば聡明な弔くんなら、わかってくれると思ったよ。

「やったね、トガちゃん。明日も来ていいよって弔くんが言ってる」

「ありがとう！ 弔くん！」

トガちゃんの顔はもう笑顔だけで人を殺せそうだ。それだけの破壊力がある。

「外出してくる」

煩わしく思ったのか、バーの外へ出る弔くん。

弔くん、ごめんね。また騒がしくなっちゃったね。許して!!

「オムライス、美味しいですよ…」

ほっぺたが落ちるくらい頬張るトガちゃん：それを頬杖をつきながら見て、あつ、幸せそうだなあ、とボクはなんともヴィランにあるまじき考えをしていた。

そんな、作戦前の束の間の出来事でした。

番外編 愛の逃走2

逃亡生活も一ヶ月が経った。あの日トガちゃんを再開してからは、ひたすらヒーローの目を欺き続けた。彼女がそう望んだようにボクもそれに応えた。まるで新婚旅行のような雰囲気各地を転々とする。その生活は楽しかった。ボクはトガちゃんが止めたいと思うまで付き合っただけだ。トガちゃんのやりたいようにやらせてあげたい。この子を悲しませたくない一心だった。だからこそ抜け落ちていた問題を尋ねられる。「そういえば、デクくんのお母さんは、わたしたちのこと知ってるんですか？後悔していませんか？」

優先するべきはキミで他の事なんて考えもしなかった。

「いい、いや……お母さんには何も言っていないよ」

ボクを泣きながら見送ってくれたお母さん。憧れのヒーローにようやく成れた日に出て行ったつきり帰ってこない息子。どれほど心配してるかは想像に難くない。

「それはやっぱりだめです。デクくんのお母さんはデクくんのことを大事に思ってます」

トガちゃんの家環境は以前聞いたことがある。何でも、トガちゃんは幼い頃から血

に興味があつて、それを気味悪がつた両親はその衝動を矯正しようとしていたと。普通になつてほしい……という。彼女には残酷な願ひだ。中学の卒業までは、トガちゃんも衝動も感情も抑えて皆から好かれる明るい元気な子を振る舞つていたようだ。普通を演じていた。しかし、卒業後当時好きだった子を刺して傷口から血を吸い出す、という事件を起こしてからは失踪。晴れてヴィランになつたという。わたしは不幸なんかじゃない。普通の人がつこり笑うようにわたしは、血を吸つて笑う……と言つた彼女はまるで自分に言い聞かせているように見えた。

「わたしは両親のこと、ちよつぴりだけ後悔してます。もつと、自分の想いを打ち明けていれば分かり合えなかつたとしても、何かやれることはあつたんじやないかと時々思うことがあります」

トガちゃんは自分に正直に生きるために犠牲となつたモノに想いを馳せる。親までヴィラン扱いされるようなこの世界でそれを考えなかつた日はないんだろう。だからこそ、ボクに問う。いや、その問いは言わせてはならない。本当にわたしのために全部捨ててくれるの？皆デクくんを大切に思つてるのに、わたしのためなら全てを断ち切れるの？と。

「その先は言わなくていいよ、トガちゃん」

彼女を幸せにしたい。辛そうな顔をたださせたくなかつた。泣いてる顔を笑顔に変

えたかった。きつと、これはボクの最初で最後のヒーロー活動なんだろう。2つとも選ぶなんて到底できない。ヴィランである彼女を一生幸せにするならば、自分の周り全ての柵を断ち切るしか方法はない。

「ボクは君を一生幸せにする。この世の全てが君を否定したって、ボクだけは君を肯定し続ける。そのためならば何も厭わない」

改めて誓う。ボクの記憶の中に残り続けるトガちゃんを忘れた日なんて一度もない。あの時から…ずっと自分に正直に生きる君に惹かれていた。

「えへへ…嬉しいです。でもそれなら尚更わたしはデクくんのお母さんに挨拶しに行かないとダメです！」

突拍子もない彼女の言葉。いや、ボクがお母さんに説明をしないと駄目な流れだったよね…？ボクの思ってることを伝えないと後悔するっていう話だったと思うんだけど…

「会ってデクくんをお持ち帰りすることを言わないとです」

「えつと…ごめん、わからないや。どうして？ボクは自分で伝えなきゃって思ったんだけど」

トガちゃんは自分の胸に手を当てる。

「わたしも一人だったらそうした方がいいなって思いました。そうした方が後悔しな

「だって。でも」

ボクを抱きしめるトガちゃん。その目は真っ直ぐこちらに向けられており、優しい顔をしていた。

「わたしたちは1人じゃありません。わたしにはデクくんが居て、デクくんにはわたしが居ます」

「だから、デクくんが捨てたモノはわたしが拾います」

ボクが捨てたモノ：捨てようとしているモノ。

「そ、そんなんじやまるでボクが救われてるようなものじゃないか」

「んふふつ、知らなかったんですか？デクくんがわたしを救いたいようにわたしもデクくんのことを救いたいです」

「わたし、ただ救われてるだけじゃ、やです。デクくんの苦悩も全部、わたしが拾ってあげたいです」

ボクはトガちゃんを笑顔にすることしか考えていなかったのに、本当は出来ていなかったみたいだ。ただ一方的に愛情を向けて、他は切り捨てる。そんなこと、彼女が罪

悪感を感じないわけがない。ボクだって、自分のためにトガちゃんが全てを捨てるなんて言ったら、全力でそれを止めて拾いに行くだろう。そんなこともわかつていなかった。

「まいったなあ……これじゃどつちがヒーローかわかんないや……」

僕の目から涙が溢れる。こんなこと言われて泣かないわけがない。

「うん、うん、挨拶に行こう。ボクの捨てたモノを一緒に拾いに行こう」

「はいーデクくん！」

満面の笑みで応えてくれるトガちゃん。敵わないなあ……と思う。

「でも、トガちゃんのお母さんとお父さんにも会いに行こうね？君が捨てたモノはボクが拾う」

「えっ……？でも、わたしの両親は……わたしのこと気持ち悪いって……」

彼女が抱えているモノ。捨てたモノ。もう彼女では拾いに行けないそれを僕が拾いに行く。だからヒーローとして培ってきた安心感を与える笑顔をトガちゃんに向ける。

「大丈夫!!僕がいる!!こんなカッコいい君のヒーローがここに居るんだ!なんとかなる!ならせる!」

「それに、君の両親も後悔しているはずだよ……だから、大丈夫!」

彼女の閉ざされた心を開く。

「だから、トガちゃんもお母さんとお父さんに挨拶しに行こう！」

「わたし、怖いです。やっぱり…でも…でも…!!」

「わたしも、お母さんとお父さんともう一度仲直りしたいよ…!!血が好きなこと、認めてもらいたいよ…!!」

トガちゃんの目からも涙が一滴流れる。そういえば、ぼくはトガちゃんの涙を見たことがなかった。いつも自分に正直に生きている裏で、こんな気持ちを抱え込んでいたのかと思うと自分が情けなくなってくる。

彼女の頭を撫でて胸に抱き寄せた。ただ逃げるだけじゃだめだ。過去を、置き去りにした過去も拾わないとだめなんだ。

ドアの前、その呼び鈴を押そうとするも、体は動いてくれない。何て説明すればいい

んだ…と頭でグルグル考えてしまつて一歩勇気を出せば簡単に押せるはずのそれが、今はテコでも動いてくれなかつた。

「大丈夫だよ、デクくん」

隣から腕が伸び、呼び鈴を押す。

「デクくんにはわたしが生る」

僕の代わりに彼女が、彼女の代わりに僕が出来ることをする。それだけの話だ。

「はい、どちら様で…出久う?!?!」

ドアから出てきたお母さんに僕は、少しの間言葉に詰まりながら

「た、ただいま…」

帰宅の言葉を呟いた。

「おかえり…心配したんだから…あと、隣の子は…?」

目に涙を溜めながら、おかえり、と言うお母さん。心配をかけてばかりだ。本当に。そして、僕の隣のトガちゃんに気付く。

「初めまして!お義母さん!わたし、トガです!トガヒミコ!」

元気良く挨拶をするトガちゃん。そして、とんでもない問題発言が繰り返される。

「デクくんの…お嫁さんです!!」

隣からの更なる爆弾発言に僕も驚く。た、確かに雰囲気的にそうだったかもしれないけど、明言してなかったしそこまで頭が回ってはいなかった。

「お、おとおつおよめ、およめ……!」

案の定、お母さんも口をあわあわさせている。どうやって説明しようか悩んでいたのに、彼女の一言で一発だ。一撃で僕らの関係性を示してしまった。

「出久う!!!」

失神した。

「爆豪君から話はきいていたんだけどねえ……」

あの後正気に戻ったお母さんは僕たちを家に招き、詳しい話をする。

かっちゃん、僕が誘拐されたのではなく合意の上でヴィランの女の子と逃げたと。簡潔に、説明してくれたようだ。頭が上がらない。逃げてごめんよ、かっちゃん。それとありがとう。

「出久がまさか、女の子と、それもヴィランの子と駆け落ちするなんてびっくりだったんだから」

「お母さん……黙って居なくなつて心配かけてごめんなさい……」

「わたしも、デクくんのこと誘拐しました、ごめんなさい」
僕たちはお母さんに謝った。

「確かに、びつくりだったけれど、出久はこの子を救いたかったんだよね？」

お母さんはよく僕を知っている。何でもお見通しみたいだ。

「うん、この子は記憶が無くなる前の僕の仲間で、恋人…だったんだ」

より正確に言えばヴィラン時代の記憶は忘れていなかった。彼女との記憶だけは。しかし、実際に会ってみるまで確信が持てなかった。

「記憶が戻ったの!?!あと、やっぱりあの時のことなのね…」

お母さんはあの時のことをあまり思い出したくないらしい。そりやそうだ。息子がヴィランになって、記憶喪失で帰ってくるなんて、とてもじゃないが耐えられないはずだ。

「記憶は彼女のことだけで…」

「そうなのね…」

しかし、お母さんは諦めなかった。ダイエツトに勤しんでいたらしい。なんで? つて聞いても、答えてはくれなかったけれど。きっとすごく重大なことが起きたんだろう。それを詮索するつもりは、ない。

「そういうことならわかったわ！ヒミコちゃん！」

「あ、はい！」

トガちゃんに目を合わせるお母さん。ヴィランでいて、その立ち位置が曖昧な彼女にお母さんは何て言葉を言うんだろうか。

「出久のこと、よろしくね？この子、すぐ誘拐されちゃうの。だからヒミコちゃんが出久のこと守ってあげてね？」

人を漫画のヒロインみたいに…そもそも僕はヒーローだよ？お母さん！

「勿論です！デクくんは誰にも渡しません!!…でも、わたし、ヴィランです。きつと…」
「言わなくていいわ。両思いで愛し合ってるんでしよう？なら障害なんて全部跳ね除けちゃえばいいのよ」

随分と豪快な持論を展開される。これにはトガちゃんも目を見開いてえ？いいんですか？本当の本当に貫つちやいますよ？なんて言ってる。

「なら、偶には帰ってくることに！それが条件！」

そんな、条件ですらないことを言われる。直前まで考えたあれこれが何も必要なかっ

た。

「嘘みたいだ……こんなものって」

「デクくん！許可でちやつたよ！」

腕にしがみつくとガちゃん。可愛い……

「あら、私はお邪魔みたいね、待ってて、いま何かお菓子でも持って」

腰を上げるお母さん。しかし、今立ち止まるわけには行かない。立ち止まれば僕もトガちゃんも決意が鈍ってしまうだろう。逃げてはいけない。このまま行くべきだ、と判断した。

「お母さん！まだ終わってないんだ。次はこの子の家に行かなきゃならない。なるべく早く」

僕の言葉にお母さんは一度目を閉じる。ごめん、今ゆっくりはできないんだ。そして、目を開いたお母さんは、両手を胸の前に持ってきて

「そう……なら！応援してるわ！2人とも!!」

僕たちのことを応援してくれたのだった。

「うん！お母さん！」

「はい！お義母さん！」

僕たちの声が重なった。

今度はトガちゃんの手が呼び鈴に止まっている。彼女を今、物凄い葛藤が襲っているんだろう。だから、僕は無遠慮に無慈悲に呼び鈴を押す。

「デクくん……わたしまだ、心の準備が」

珍しく、眉を寄せて少し手を震えさせるトガちゃん。

「必要ないさ。大丈夫だよ。僕がいる」

その震えを少しでも止めたくて、笑う。彼女のためだけのヒーロー。

「どちら様でしょうか……ヒミコ……!?!」

事件を起こした後何年も帰ってこず、ヴィランになった娘。元々血が好きで異常だと言っていたけれど、娘が帰ってきたことの方が今は大事……だと思う。

「久しぶりだね、お母さん……。えっと……ただいま……」

戸惑いながらも、再会を果たす2人。

「おかえり……ヒミコ……」

お父さんと呼んでの挨拶は難航を極めかけた。何せトガちゃんはいらんなのだ。このヒーロー鮑和社会でヴィランの親、というだけで白い目で見られる。しかし：

「あの時私たちが認めてやれずにごめんねヒミコ。窮屈な思いをさせてしまっていたわ。あの時認めて上げられればこんなことにはならなかったかもって私思うの」

「すまんかったなヒミコ……」

気味悪がられることも覚悟していた僕たちにその謝罪はひどく肩透かしを受けた。

「お母さん、お父さん……わたし、自分に正直にしか生きられなかった！何も言わず出て行って……ごめんなさい……」

トガちゃんのご両親とも和解できたようだ。血が好きだったから。抑圧されて悪い方向に行ってしまった関係が、今修復されたんだ。

さて、僕の出番かな。

「お母さん、お父さん。改めて僕は緑谷出久と申します。僕と彼女の関係は…えっと、婚約者です」

「あなた…テレビに出てたヒーローさんよね…?」

「二応、元プロヒーローと言いますか、僕は彼女と添い遂げることにしました。だから元ヒーローです」

「彼女はこれからも血を欲し続けるでしょう。抑圧されている限り彼女にとって生きにくい世の中です。そして、たとえ彼女がヴィランであつても幸せに生きるためなら、僕は何があつても彼女の味方で居続けます」

「正しいとか正しくないとか、罪を償うとか償わないとか、全部関係なく、彼女の意思を優先します」

「だから、トガちゃんを、ヒミコを僕に任せてください!」

「えへへ……2人と仲直りできました。嬉しいです、デクくん」

ホテルのベッドで横になる僕たち。あの後、ヴィランとか関係なくヒミコを幸せにして下さい、という2人の想いを胸に、僕たちはまた、逃亡生活のようなものに戻る。国外に飛んで暮らそうという目標もできた。

「良かったね、本当に」

「はい、全部デクくんのおかげです」

「それはこっちも同じだよ」

互いが互いの捨てたモノを拾いあった。迷いや過去を振り返った。取り戻した。

そして首筋にナイフを突きつけられる。彼女はひどく興奮していて、もう1秒も待てない様子だった。

「デクくん、わたし今人生で一番幸せです。愛しています。だから、ちうちうしたいです。いいよねえ？」

「いいけど、僕が死なないようにしてね」

翌朝、血痕が派手についたシーツを見て僕らはホテルの人に何と説明しようか頭を悩ませるのであった。